富山市安養寺遺跡発掘調査報告書

1998年3月

富山市教育委員会

調査区と周辺の地形（空撮）

調査区全景（空撮）

調査区全景（空撮）

井戸SE02断ち割り（南東より）

序

富山市は富山県のほぼ中央にあって、北は日本海に面し、東は3000ｍ級の立山連峰を仰ぎ、西には緑豊かな呉羽丘陵を擁する自然環境に恵まれた都市であります。このような土地に先人は居を定め、時代ごとの個性ある文化を育んできました。土地に刻まれた文化の痕跡は、遺跡として残り、それらは郷土富山の歴史を知るためのかけがえのない遺産であります。これを保護し未来へ継承していくことは現代に生きる私たちの重要な務めと考えております。

富山市内には約600か所におよぶ遺跡がありますが、本委員会では各種開発事業に伴って失われていくそれらについて事前発掘調査を実施し、遺跡の記録保存に努めているところです。

今回発掘調査した安養寺遺跡では、中世廃寺「安養寺」を探るてがかりともなる中世や近世の墓、居住遺構を検出し、とりわけ富山市南部地域の歴史を探る上で貴重な成果が得られました。

本報告書が本市文化財保護行政についてのご理解と認識を深める一助となり、また学術研究の資料としても活用いただければ幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査にご理解ご協力を賜りました建設省北陸地方建設局富山工事事務所（所長　中村　昭）および有限会社平野石油店（代表取締役　尾間　央）をはじめ、地元安養寺地区の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成10年３月31日

富山市教育委員会
教育長　大　島　哲　夫

例言

1．本書は、富山市安養寺地内に所在する安養寺遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、建設省北陸地方建設局富山工事事務所（所長　中村　昭）が施工する国道41号線大沢野拡幅に伴う地下道ＢＯＸの工事及び有限会社平野石油店（代表取締役　尾間　央）が施工するガソリンスタンド増改築工事にかかわるもので、両者からの委託を受けて富山市教育委員会が実施した。

3．調査期間

現地調査　平成９年７月23日～
平成９年10月14日

遺物整理　平成９年７月23日～
平成10年３月31日

4．調査担当者

調査は、富山市教育委員会事務局主幹　藤田富士夫が担当し、生涯学習課学芸員　堀沢祐一・近藤顕子が補佐した。本書の執筆は、藤田が行った。なお、Ⅲ－４及びⅣの「土器・陶磁器、金属製品」の箇所は富山県埋蔵文化財センターの宮田進一が執筆した。

5．調査にあたり、富山県教育委員会文化課、富山県埋蔵文化財センターから指導を得た。

また、調査から報告書作成に至るまで次の方々や関係者からご協力をいただいた。記して謝意を表します。

宮田進一、高梨清志（土器・陶磁器写真撮影）、京田良志、斎藤隆、橋本正春、西井龍儀、安養寺町内会、日本海建興、グリーンマーケット富山南店、中部自動車商会（敬称略）

6．遺構記号は、溝跡：SD、井戸跡：SE、道路跡：SF、土坑：SK、ピット：P、墓：SZ、その他の遺構：SXとし、記号の後に通し番号を付けた。

7．出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。

Ⅰ　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置

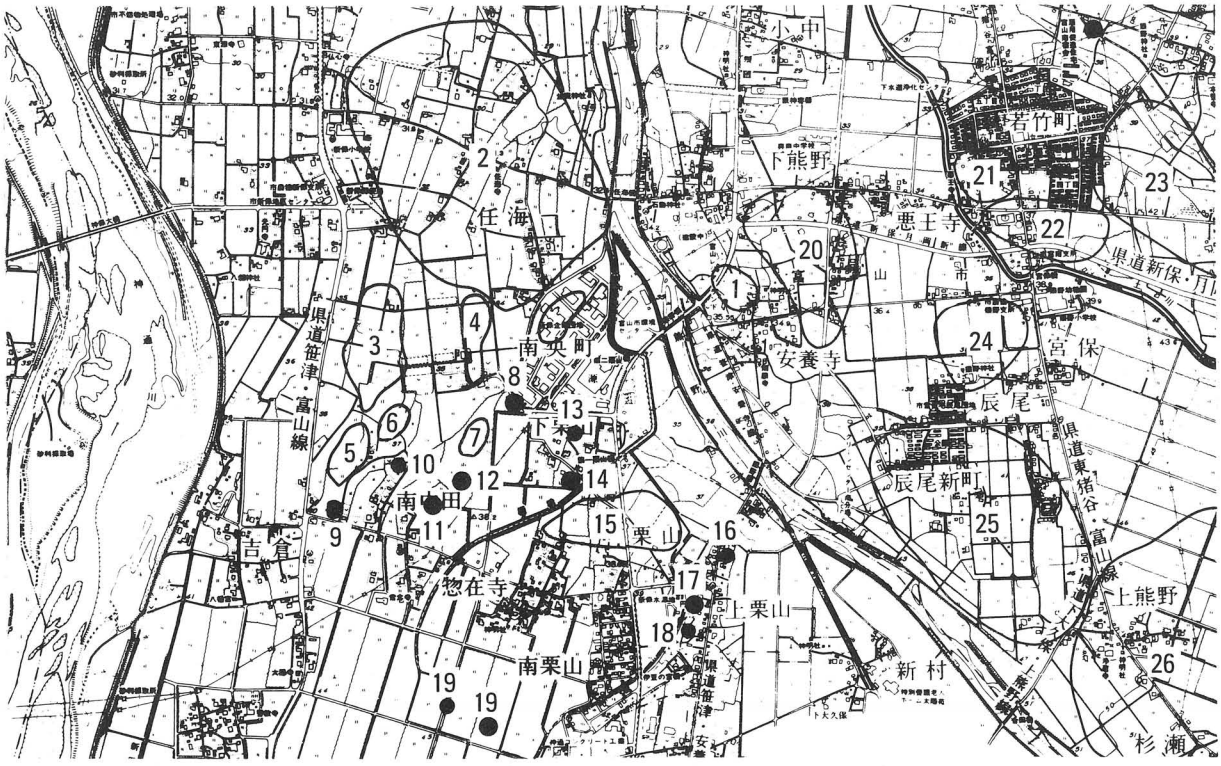
安養寺遺跡は、富山市街の南約８kmの安養寺地内に位置している。遺跡に東接して富山県と岐阜県とを結ぶ国道41号線があり、一級河川熊野川にかかる熊野橋は遺跡と指呼の位置にある。遺跡の西方約150ｍには熊野川が流れている。熊野川は、大山町の西笠山に発し、東福沢から平野部へと流れでて富山市有沢橋上流で神通川に合流する。急流河川のため、これまで何度か豪雨による大規模な災害が発生している。1910年（明治43）には１月から９月までに10数回の出水があり、堤防決壊や浸水被害をみている。また、1914年（大正３）には最高水位3.9ｍにもなり溺死者や家屋流出の被害もみた。このような災害の発生は、1984年の熊野川ダムの完成によって解消されるところとなった。

安養寺遺跡は、熊野川の右岸扇央部に立地し標高約33.5ｍを測る。近域地での現在の熊野川の川底は標高35～36ｍであり、遺跡は熊野川よりも低位置に立地している。熊野川は、安養寺遺跡の位置する辺りからそれまでの北西流路を北へと変えている。遺跡は、その変換点に立地している。

江戸期には越中から飛騨に通じる飛騨街道が熊野川添いに南北に走っており、本遺跡の北西約400ｍにある任海橋の辺りには熊野川の「任海の筏橋」があったと伝えている。この地域は、富山・飛騨・任海・下熊野・八尾方面からの街道が交差し、当地が交通の要衝であったことを示している。

2　周辺の遺跡

安養寺遺跡の近域では、古代～中世の遺跡が爆発的な増加をみせている。この前史をなす遺跡では、伊豆宮Ⅱ遺跡（縄文時代中期後葉）や栗山Ａ遺跡・大利屋敷遺跡（晩期）があり、首長権力の存在を



1．安養寺遺跡　2．任海宮田遺跡　3．吉倉Ｂ遺跡　4．任海遺跡　5．南中田Ｄ遺跡　6．任海鎌倉遺跡　7．栗山楮原遺跡　8．任海砂田遺跡　9．吉倉Ａ遺跡　10．南中田Ｃ遺跡　11．南中田Ｂ遺跡　12．南中田Ａ遺跡　13．栗山塚　14．惣在寺廃寺　15．栗山Ａ遺跡　16．伊豆宮Ⅱ遺跡　17．円教寺遺跡　18．伊豆宮古墳　19．大利屋敷遺跡　20．下熊野遺跡　21．悪王寺遺跡　22．若竹町遺跡　23．吉岡遺跡　24．宮保遺跡　25．辰尾遺跡　26．上熊野遺跡

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡
（Ｓ＝1:25,000）

示す古墳終末期の横穴式石室を有する伊豆宮古墳（変形八角形墳）が営まれている。

本遺跡とは、熊野川を挟んで対岸に位置する友杉・任海・南中田・栗山地区一帯には、古代から中世の大規模な遺跡が集中的に展開する。主な遺跡として、任海宮田遺跡、任海鎌倉遺跡、南中田Ｄ遺跡、栗山楮原遺跡、吉倉Ｂ遺跡などがある。任海宮田遺跡・吉倉Ｂ遺跡では、「城長」・「観音寺」と書かれた墨書土器や瑪瑙製の石帯の帯飾りが発掘されており、官衙クラスの施設あるいは寺院など中核的施設が存在した可能性が指摘されている。

中世～近世には安養寺、任海池原寺、惣在寺などが存在していたとされているが、詳細については不明である。なお任海池原寺跡の推定地から須恵器、珠洲、青磁が出土している。

Ⅱ　調査の経緯

平成８年７月に安養寺遺跡地へのガソリンスタンド増改築工事（有限会社平野石油店）及び一般国道41号線大沢野拡幅に伴う地下道ＢＯＸの工事（建設省北陸地方建設局富山工事事務所）の計画の事前協議が富山市教育委員会にあった。これを受けて、市教委では試掘調査を平成８年８月30日・31日に行った。試掘調査では当該地に約420㎡にわたって中世の遺跡が存在することが確認された。このため遺跡の対応について検討したところ工事の実施はやむを得ないと判断され、本発掘調査を市教委が両原因者から受託して行うこととなった。なお、調査は遺跡地を流れる農業用水の切り回しについて地元安養寺町内会や関係者のご理解を得て行った。

Ⅲ　調査の概要

1　調査の方法

本調査は、試掘調査の成果を受けて平成９年７月23日から同年10月14日まで実施した。まず、事前に重機により表土から遺構確認面の上層（第６層）まで一気に排土した後、第７層を人力による排土を行い、遺構検出を試みた。

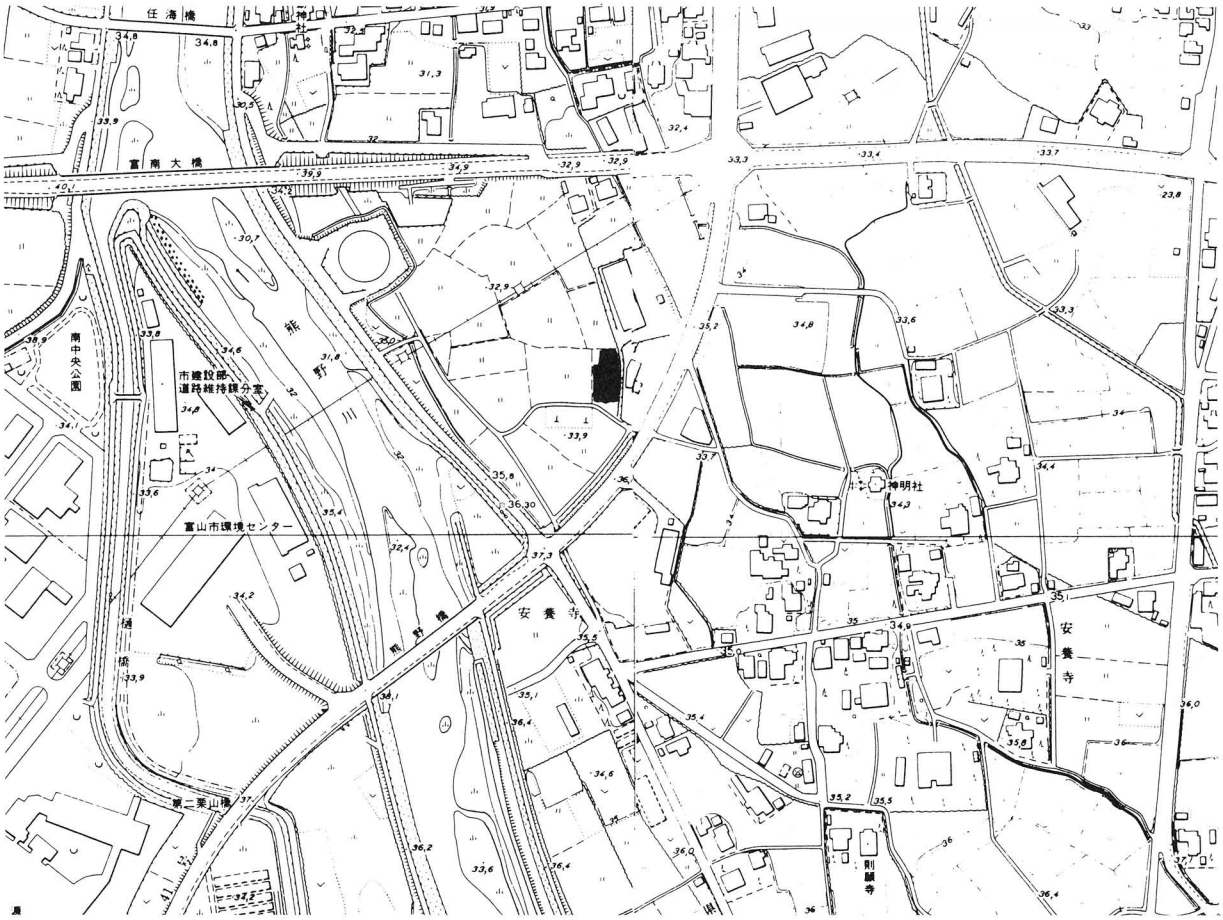
遺跡南東の過半では、礫が第４層を削り込んで地山上面にまで達していた。第７～８層中には礫が密集混在し中世の石塔が原位置を遊離して出土した。調査では、このような後世の自然流入礫と遺構を構成している人為的配置礫との見極めが課題であった。このような中で遺構の検出にあたっては、地山面（第９層）をいくらか掘り込んで規則的に形成されていることや、第８層中に炭化物を含んでいることなどを目安としながら自然礫を除去して行った。

2　層序（第３図）

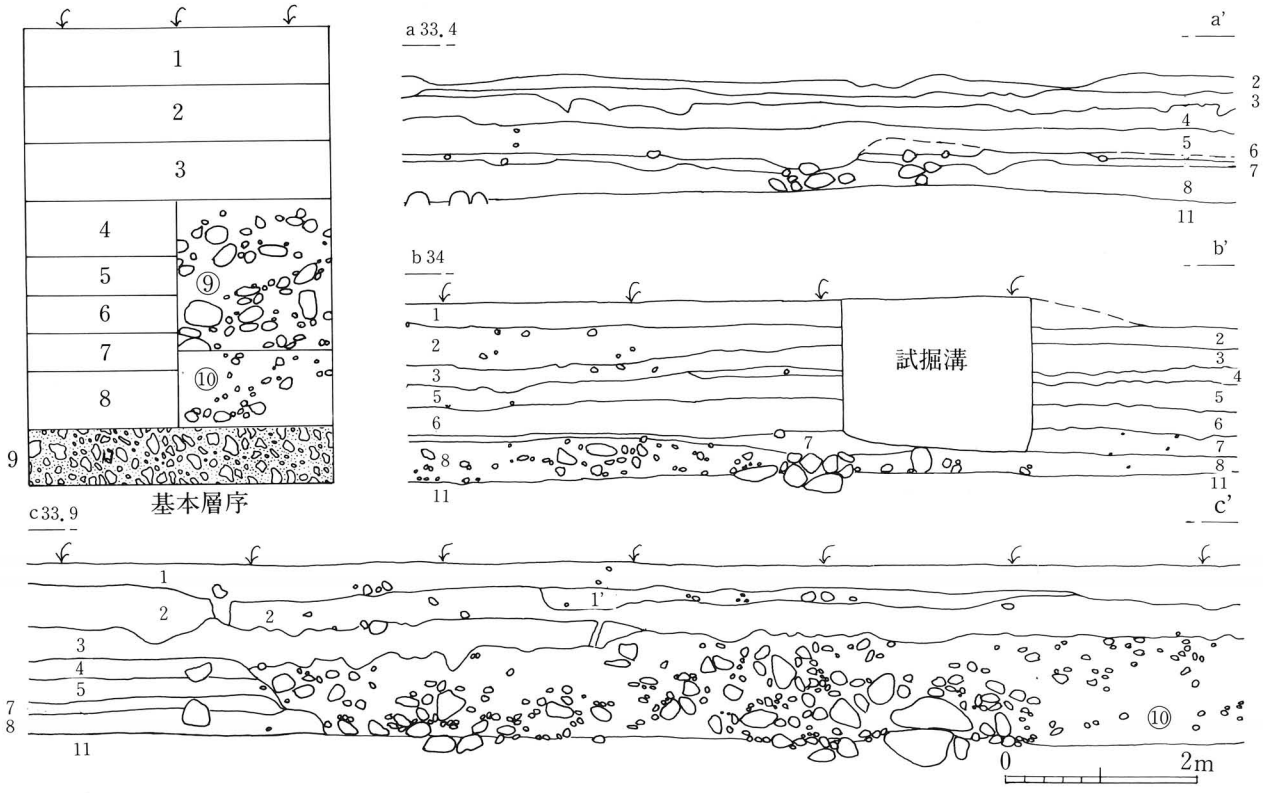
基本層序は、第１層灰褐色表土、第２層灰褐色シルト、第３層黄色シルト（粗粒）、第４層暗灰褐色粘性土（硬質）、第５層黄褐色粘性土、第６層黒褐色粘性土、第７層明黄色粘性土、第８層暗灰褐色シルト土、第⑨層暗茶褐色土（やや粘性あり、礫多量含む）、第⑩層明褐色シルト土（粗粒・礫多量含む）、第11層砂礫土、となっている。

中でも第３層や第５層は黄色系でひときわ目だち、上半と下半層とを区分するメルクマールともなる。なお、第５・６・７層は地点によって、いくらか薄くなったり消失したりすることもある。第⑨層と第⑩層は東壁部に顕著で、第４層を削り堆積し第９層上面にまで達していた。これらの層には小砂礫から大は直径40cm前後の礫が多数混在しており、北東方向からの洪水現象を示していた。北東壁の観察では「試掘溝」の辺りまで第８層中へ礫の嵌入がみられた。

本遺跡では礫石層が流入し土層を攪乱していることから、地点によって変化が著しい。このため基本層序の比定に際しては、礫の混入がほとんどなく整合堆積と判断される東壁の北寄り部を基準とした。



第2図　遺跡周辺の地形と調査区(1:5,000)



第3図　基本層序と土層図
(a-a'、b-b'、c-c'は第4図に対応)

第4図　発掘区域と遺構配置図

3　遺構

今回の調査によって検出した主な遺構は、次のとおりである。

溝跡

SD01（第５図、図版１－４・５）推定幅約２ｍ、深さ約80cmで東西に走る箱薬研堀タイプを呈する。溝内上層には、こぶし大から人頭大の礫が多数含まれていた。この礫群は人為的に投棄されたものと観察された。また、この礫群に混在して15～16世紀の土師器が出土した。この溝は東端で深さと幅を減じ、ＳＤ03と連結する。なお、ＳＤ01の西半分は、水路の切り回し部分と重複したため未確認である。

SD02　東壁に接して南－北方向に走る溝が検出された。推定幅約１ｍ、深さ15～20cmを測り黒色系覆土を有する。この溝のほぼ中央部に濁りのある灰青色の覆土をもつ溝が確認された。この溝は、幅約30cm、深さ約15cmで箱堀タイプを呈する。灰青色覆土溝が廃棄された後、黒色系覆土溝が構築されている。

SD03・04（第５図、図版２－１）ＳＤ01と連結する溝で、ＳＤ01の南側に幅と深さを減して検出された。X69604～69606では平面プランがＬ字状を成し、この部分では直径20～30cmの自然石が主に西側上面から溝の縁にそうようにして検出された（SD04）。この下方には、溝の西縁石として長さ20～30cmの細長い石が、溝の東縁石には直径10cm前後の自然石が密に貼石されていた。

井戸跡

SE01（第６図、図版２－２、３－１）

円形プランを呈する石組井戸で、開口部の径65cm×60cmを測る。検出面より深さ160cmで基底部に達する。基底部は、長円形の自然礫４個を一辺が35cm×40cmの方形に配置している。この井戸は廃棄されており意図的に埋められていた。上層部は、直径15cm前後の河原石数個と５～８cm大の小礫で埋められていた。これを除去すると、中央部に丸石を置き、その東には自然面を残した断面三日月形の扁平な円礫が置かれ、西には棒状の自然石が直立出土した。この下層は、５～８cm大の小礫が充填されていて、基底部近くに直径約 45cmの扁平石があたかも蓋をするかのように置かれていた。この下方には小礫が厚さ約８cmで敷き詰められていた。

SE02（第６図、図版３－２、巻頭カラー）

円形プランを呈する石組井戸で、開口部の直径約70cmを測る。地山検出時では、北東過半部（第６図の矢印間）の上端石は除去されていて確認されず、南西過半部の半円礫の配置だけを認めた。従って、第６図の平面プランの北東過半は二段目の石積みであり、南西過半は検出面での石積みである。この井戸は、検出面より深さ約130cmで基底部に達する。基底部は、長円形の自然礫５個と地輪１個でもって六角形状を呈している。この井戸は廃棄されており意図的に埋められていた。上層部は、砂礫土が充填されており、上縁石より約40cm掘り下げると直径約50cmの扁平な石があたかも蓋をするかのように置かれていた。この下層は砂礫土で構成されるが、直径５～８cm大の小礫が目だって混入していた。基底部に一端を接したスギの板材が一枚、斜位で出土した。

なお、この井戸を構成する石材には上縁石から基底部縁石まで、五輪塔の地輪が９個も転用されていた。また、掘り方は、直径約1.4ｍの円形状を呈していた。

SE03（第６図、図版３－３）

円形プランを呈する素掘井戸で、開口部は南北がやや大きく1.5ｍ×1.2ｍを測る。壁面は緩い傾斜をもって立ち上がる。砂礫層を深さ約60cm掘りこみ平坦な底面を呈する。井戸は、人為的に小石で埋められており、小石の間に黒褐色土が入り込んでいるような状況であった。上層からは珠洲や土師器

が出土した。ＳＥ03は、廃棄井戸と推測された。

SE04（第６図、図版４－１）

円形プランを呈する石組井戸であるが、縁石のほとんどを欠いている。基底部の北側に二段分の縁石が部分的に確認できることから、石組構造であったと推定できる。掘り方は直径約210cmで、深さは約90cmを測る。覆土には、直径20cm前後の自然礫が多数投げ込まれており、中には五輪塔の火輪の混在があった。ＳＥ04はＳＤ01と重複関係にあり、上層面では井戸に投げ込まれた自然礫が円形状を成してこの箇所に集中していた。このことや土層がＳＤ01を切っていたことから、ＳＥ04が新しいと判断した。

（単位cm）

P･SK番号	長径×短径×深さ	形 態	特 記 事 項
P01	35×26×35	略円形	
P02	38×30×11	円形	
SK03	(150)×165×29	略円形	SE03に北壁を切られる
SK04	130×115×17	方形	
SK05	162×92×20	楕円形	
SK06	162×80×17	不整長方形	中世完形土師器皿出土
SK07	51×42×24	円形	打割面をもつ礫含む
SK08	152×82×24	長円形	
SK09	(130+α)×80×7	長円形	SK10に西壁切られる
SK10	230×160×25	不整長方形	珠洲焼破片を覆土に含む
SK11	95×48×7	長円形	
SK12	112×80×64	長円形	
SK13	17.5×(17.5)×37	円形	炭化物の混入あり
SK14	180×155×5	不整形	

※（ ）は推定長

第１表 P･SK一覧表

道路跡

SF01（第７図、図版４－２）

ほぼ南北に走る道路跡を北端部で検出した。これは、地山面に幅70～90cmで乾くと白色を呈する砂利が厚さ５～10cmで堅く敷きつめられており、X169616で北西－南東の石列まで延びている。明快な縁石は確認できなかったが、その可能性のある南北方向の配石を何個か認めることができた。

ピット、土坑（第８図）

主要なピット（Ｐ）及び土坑（ＳＫ）は、第１表のとおりである。

配石墓・土壙墓

SZ01（第11図、図版５－１・２）

長軸約3.5ｍ×短軸約2.8ｍ、深さ約30cmの長方形プランを呈する土坑の中に、40～50cm大の自然石を、東に開口するコ字状に配石する。配石の規模は、内法で約1.8×約1.4ｍである。配石内の覆土は、茶褐色シルトを主にしていた。配石の間や床面などから、越中瀬戸の皿などが出土した。なお、配石の西側外周には比較的小さな礫が裏込石として検出された。また、北東隅から北方向に40～50cm大の長円礫が４個一列に配置されており（ＳＸ05）、ＳＺ01に伴うと判断された。

SZ02（第10図、図版６－１・２）

長軸約2.1ｍ×短軸約1.9ｍ、深さ約30cmの略方形プランを呈する土坑の中に、40cm前後の自然石を、南に開口するコ字状に配石する。配石の規模は、内法で約1.6×1.1ｍの方形を成す。配石内の覆土は、茶褐色シルトを主にしていた。配石は、長軸を内側にそろえて置かれる傾向があり、北東隅には五輪塔の地輪が転用されていた。北西に位置する配石の外側から越中瀬戸の皿が出土した。

なお配石の東側ではＳＤ02と重複するが、ＳＺ02が新しい遺構であると判断された。

SZ03（第９図、図版５－３）

発掘区の南東隅で確認された。南北長約1.8ｍを測る。東西長は、東側に既存の塀があって調査対象外であったため不明。ＳＺ02と同様に、南に開口するコ字状配石が認められた。なおＳＺ03では、基壇配石は土坑内ではなく地山に直置されており、その上に石が水平積みされているのが、土層面に確認された。この石積み中には、五輪塔地輪・空風輪が混在していた。

SZ04（第10図、図版６－３）

ＳＺ02の北に接して確認された。東西約2.6ｍ、南北約2.0ｍの範囲に不正円形で浅いくぼみを作り、そこに大小の礫が集中していた。それらの礫はほぼ一重積みで、配置には格段の規則性は認められな

かった。礫を排出していくと、礫と礫の間に2枚の完形の土師器皿が重なって出土した。なお、ＳＸ06を境として南に本遺構の落ち込みが始まっており、ＳＸ06がＳＺ04に伴う可能性がある。

SZ05（第12図、図版７－２・３）

直径約1.1ｍ、深さ約15cmの円形プランを呈する土坑で、中からは越中瀬戸の皿が３枚、底部を上にして出土した。

SZ06（第12図、図版７－１・２）

長軸約95cm×短軸約80cm、深さ約25cmの隅円長方形プランを呈する土坑で、皿状の断面形をなす。上面には、小礫が集中して置かれていた。礫の中層から越中瀬戸の皿が１枚、底部を斜め上にして出土した。ほかに刀子型鉄製品が１点出土した。

その他の遺構

SX01（第４図）

ＳＤ01の東肩に二個対になった扁平石が南北方向に一列になって出土した。あたかも土台石の印象を受けたが、性格は不明。

SX02（第７図、図版４－３）

五輪塔の地輪を含む石列が、ほぼ南北方向に走る。石列はいずれも地山に埋め込まれていた。

SX03（第７図）

やや大形の石を配置した石列である。石列はいずれも地山面に置かれた状態で検出された。

SX04（第７図、図版４－２）

地山面に置かれた石列で、北から延びる道路跡（ＳＦ01）がこの石列で止まる。ＳＦ01と関連した施設の石列と思われる。

SX05（第４図、図版５－１）

ＳＺ01の北東部に置かれた石列でＳＺ01の床面にまで延びており、ＳＺ01に伴う施設の可能性がある。

SX06（第４図、図版６－３）

東西に一列に走る石列で、ＳＺ04に伴う施設の可能性がある。

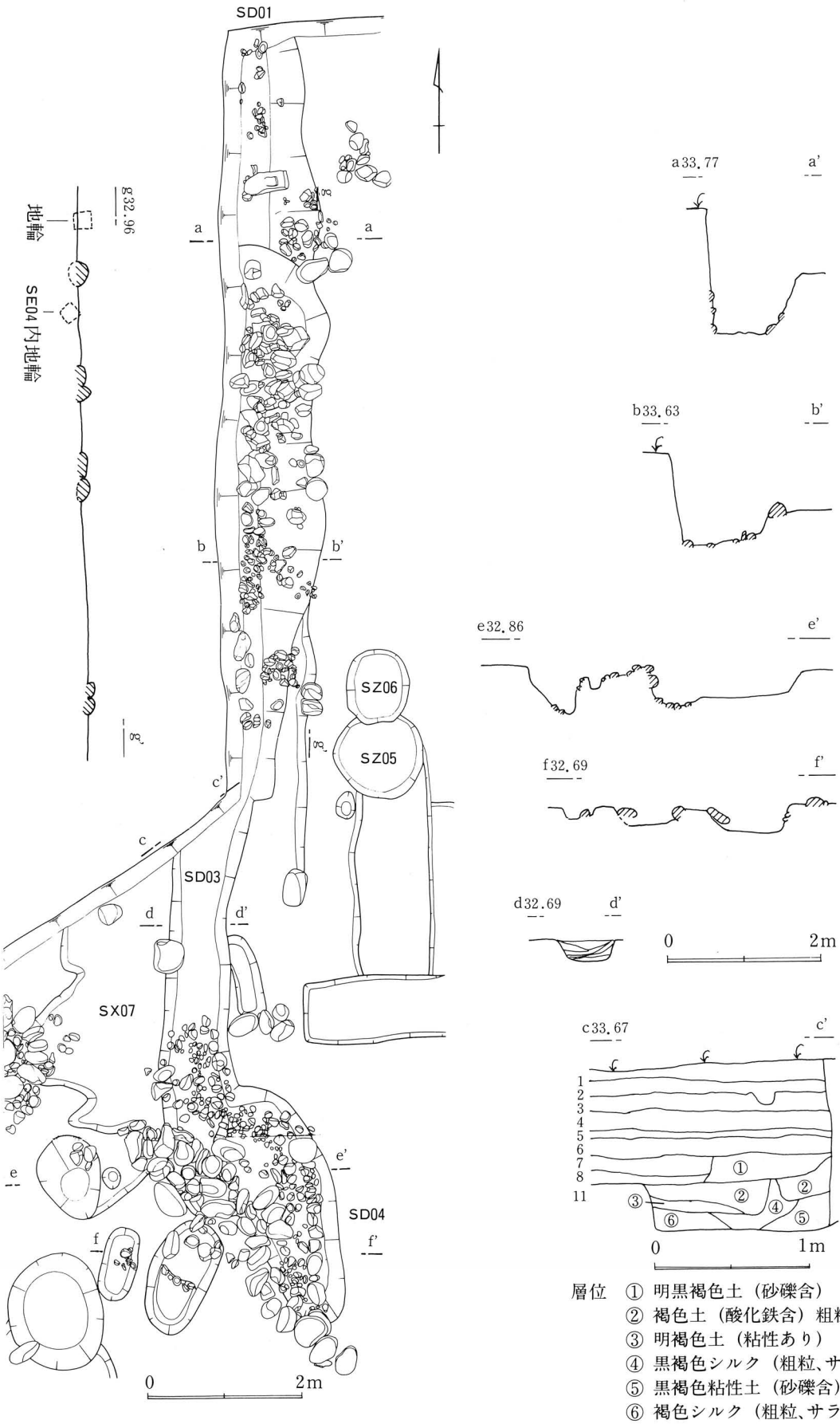
SX07　Ｘ69606～69612・Ｙ3980～3988の間の発掘区の地山面が硬く締まっており、炭化物粒子の分布が顕著であった。特に、井戸跡ＳＥ02の東のＸ69606～69608・Ｙ3982～3984に焼土や炭化物が著しく見られた。礎石などは認められなかったが、この範囲に建物が存在した可能性が大きいと観察された。また、ＳＤ01の東肩に二個一対の扁平石が少なくとも３箇所で検出され（ＳＸ01）、建物の土台石を思わせた。

SX08（第４図）

硬くしまったシルト質の地山面が認められた。この地区では浅い帯状の落ち込みが南北に走っており、何らかの施設の存在を示唆していた。

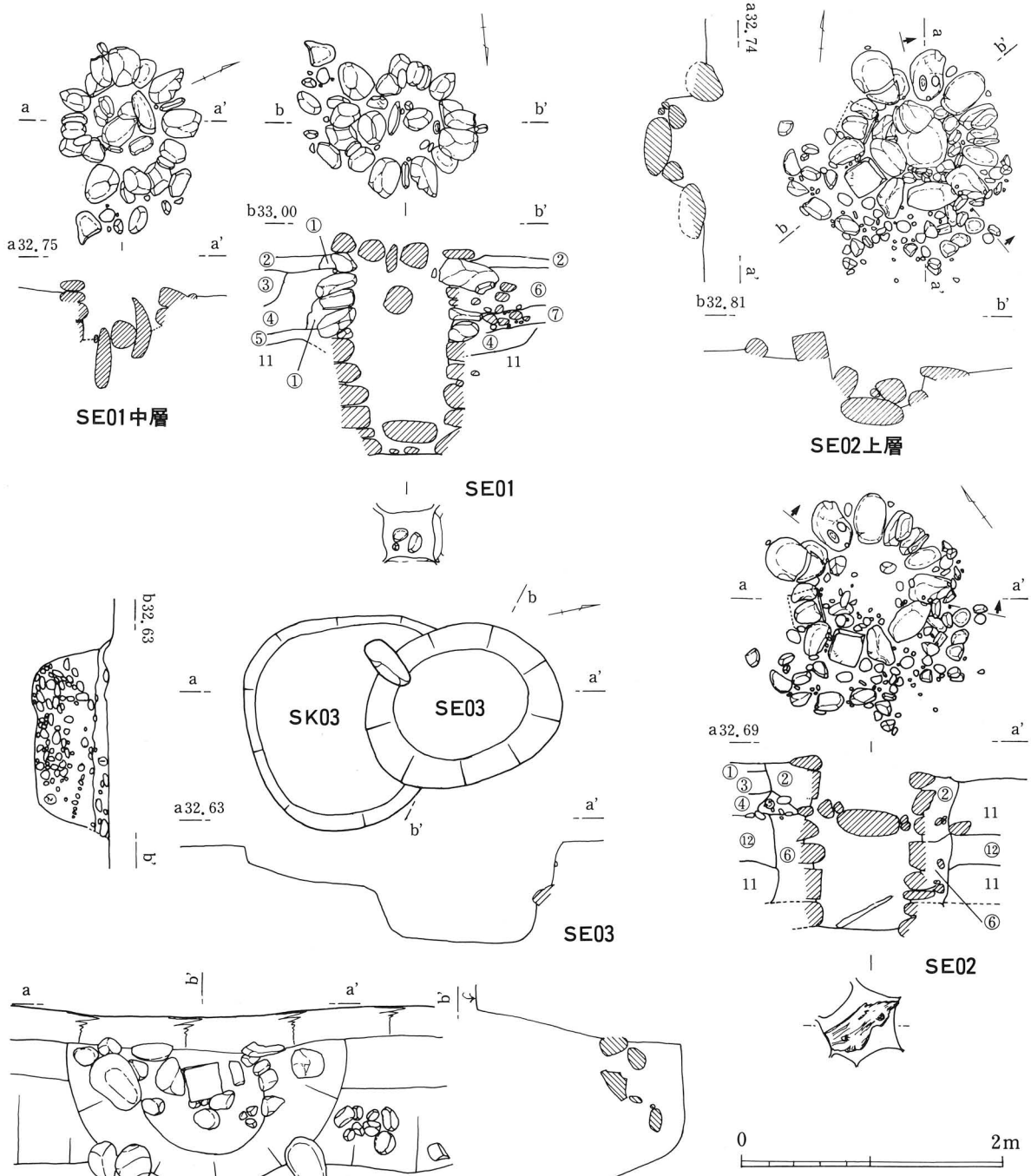
SX09（第４図）

小ピットや焼土混入の第８層が分布し、不整溝状遺構などが集中し、何らかの施設の存在を示唆していた。



層位　① 明黒褐色土（砂礫含）
② 褐色土（酸化鉄含）粗粒
③ 明褐色土（粘性あり）
④ 黒褐色シルク（粗粒、サラサラ）
⑤ 黒褐色粘性土（砂礫含）
⑥ 褐色シルク（粗粒、サラサラ）

第5図　溝跡（SD01・03）



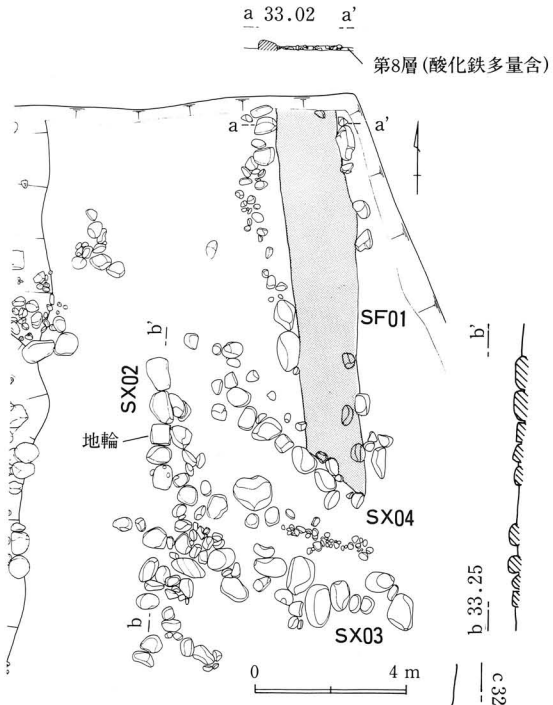
SE01層位
①黒褐色土と黄褐色シルト混合の土
（粘性強い、直径3㎝大の礫混じり）
②暗褐色シルト（微小炭化物含む）
③褐色シルト
④明褐色シルト（赤褐色酸化鉄含む）
⑤灰黒褐色粘性土（微小炭化物含む）
⑥黒褐色砂礫
（直径6～10㎝大の礫混じり）
⑦褐色砂礫（軟らかな混入土）
11 砂礫土

SE02層位
①暗褐色土（細砂粒含む）
②黒褐色土（粗粒、粘性強い、小礫含む）
③褐色砂礫土
④褐色シルト
⑤明褐色砂礫
⑥暗褐色砂礫（黒褐色粘土混り）
⑦明褐色シルト（基盤土）
11 砂礫土

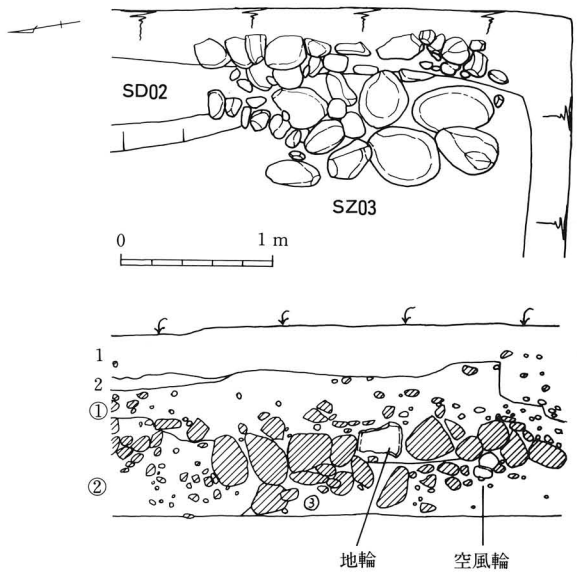
SE03層位
①茶褐色シルト
（粘性強く乾くと硬くなる）
②黒褐色土混りの小礫層
（粗粒、乾くと硬くなる）

SE04層位
①茶褐色土
②暗茶褐色土（粗粒）
③明褐色土（砂礫含む）
④明黒褐色土（砂礫含む）
⑤褐色シルト（サクサクしている）
⑥明褐色シルト（サクサクしている）
⑦明褐色シルト（やや粘りあり）
⑧褐色土（粗粒、砂礫含む）
⑨暗褐色粘性土（粘りあり）
⑩明茶褐色土
⑪暗茶褐色土
（②層よりも粗粒、砂礫含む）
⑫黒褐色粘性土（粘りあり）
⑬黒褐色土（粘りあり）

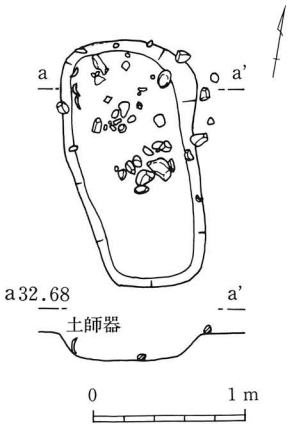
第6図　井戸跡（SE01・SE02・SE03・SE04）



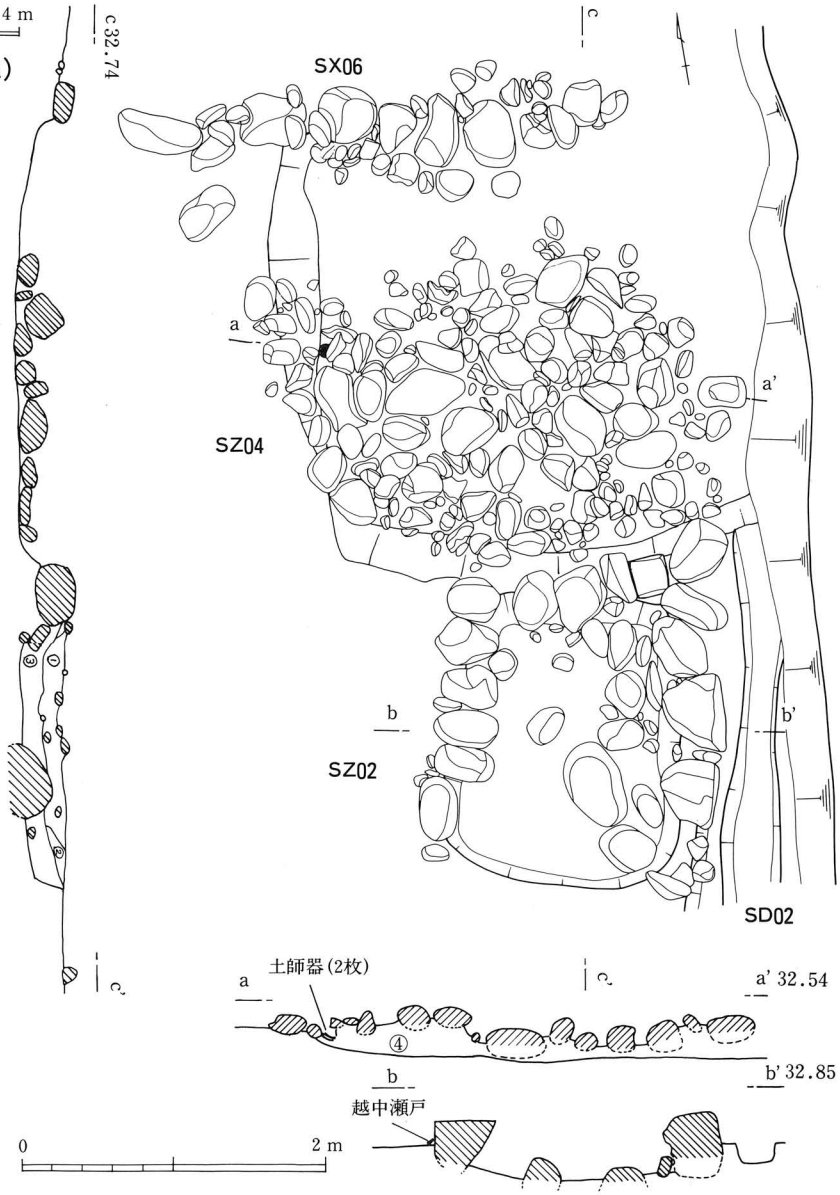
第7図　道路跡(SF01)とその他の遺構(SX)



第9図　配石墓(SZ03)

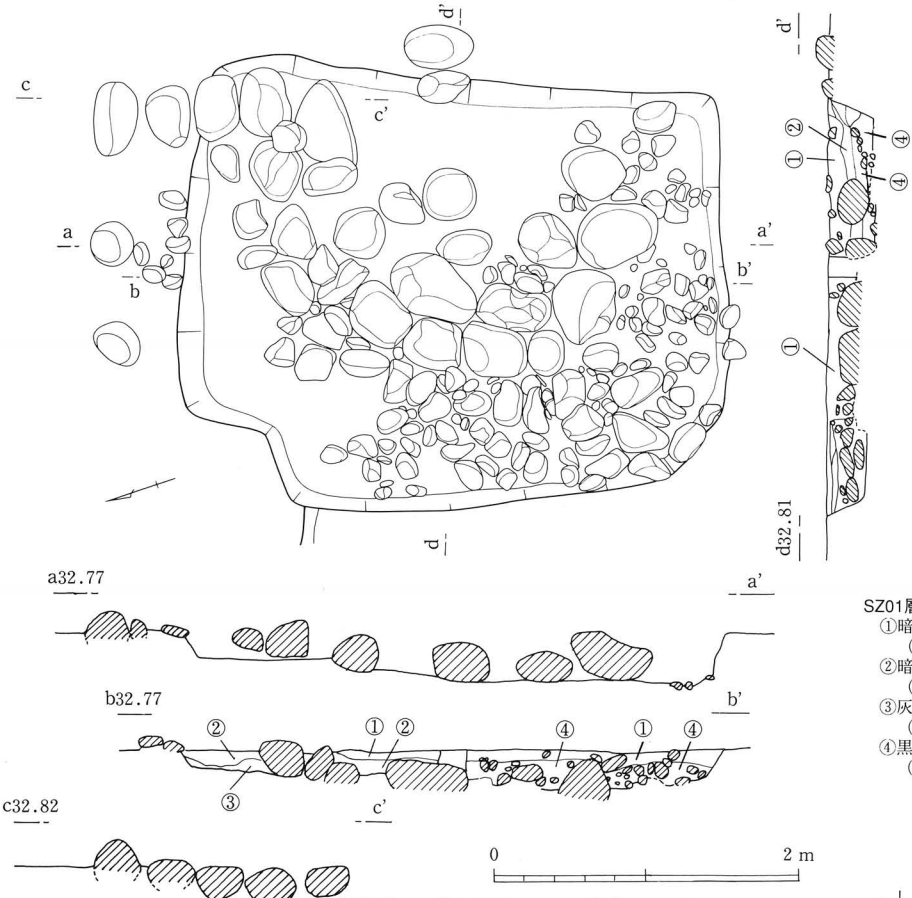


第8図　土坑(SK06)



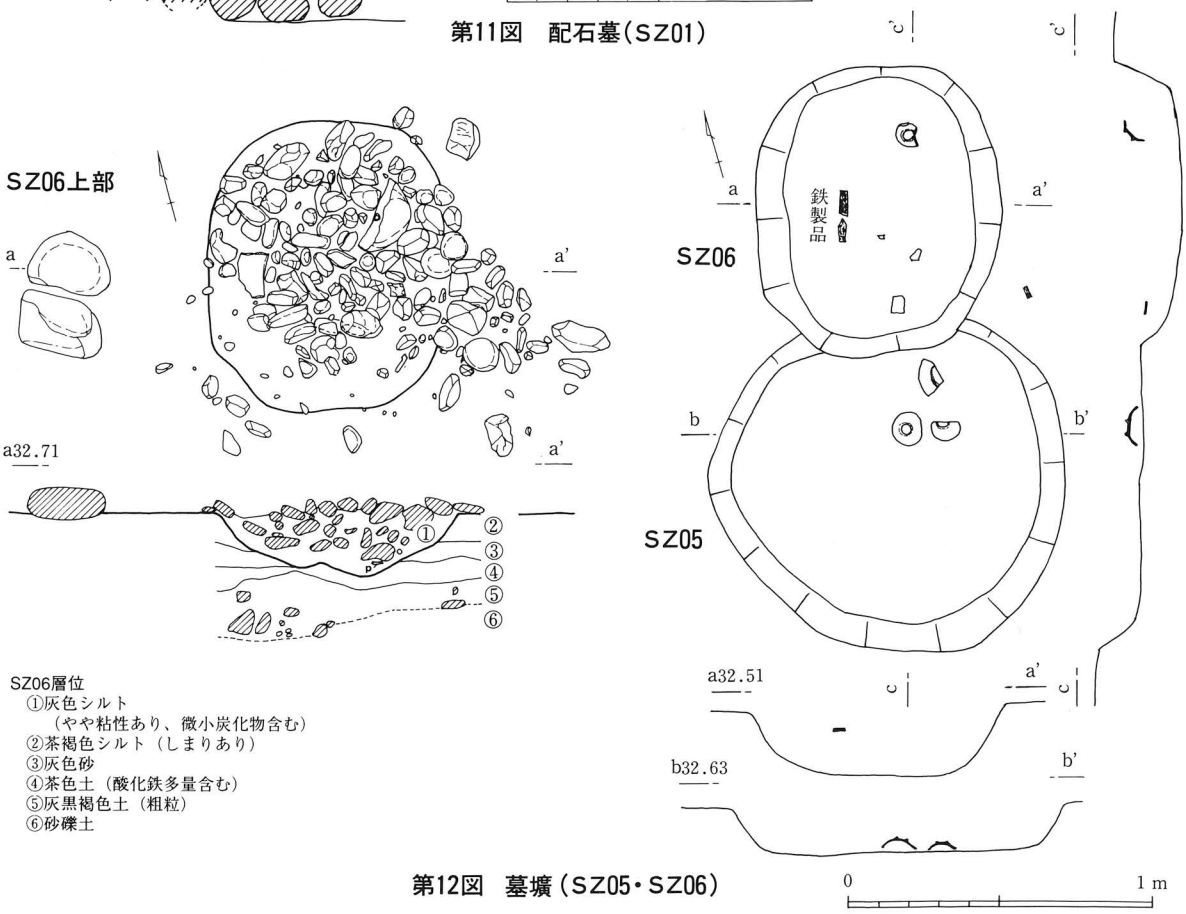
SZ02層位
①暗褐色土(茶褐色シルト混り、粗粒)
②茶褐色シルト
③灰褐色土(茶褐色シルト混り、細密、軟らかい)
SZ03層位
①灰黒色土(硬くしまりあり)
②黒褐色土(粘性強い)
③暗褐色土(赤褐色酸化鉄含む)
SZ04層位
④茶褐色土(粘性強い、砂利含み)

第10図　配石墓(SZ02・SZ04)とその他の遺構(SX06)



SZ01層位
①暗褐色土
（茶褐色シルト混り、粗粒）
②暗褐色土
（茶褐色シルト混り、粘性強い）
③灰褐色砂
（茶褐色シルト混り、サクサク）
④黒褐色土
（茶褐色シルト混り、粘性強い、細密）

第11図　配石墓（SZ01）



SZ06層位
①灰色シルト
（やや粘性あり、微小炭化物含む）
②茶褐色シルト（しまりあり）
③灰色砂
④茶色土（酸化鉄多量含む）
⑤灰黒褐色土（粗粒）
⑥砂礫土

第12図　墓壙（SZ05・SZ06）

4　遺物

包含層がほとんど確認できないため、遺物は、溝・配石墓・土坑などの遺構やその周辺から多く出土している。特に、SD01・SZ01・SZ04・SK06などからの出土が目立つ。出土した遺物には、土器・陶磁器、金属製品、石製品などがある。所属時代は平安時代と鎌倉時代～近世で、後者に中心がある。

土器・陶磁器（第13図）

土器・陶磁器には、須恵器、中世土師器・瓦質土器・八尾・珠洲・瀬戸・青磁・白磁、越中瀬戸・肥前陶磁器などがある。時代は9世紀、13世紀後半～18世紀のものである。前者の時代は須恵器4点で、甕・有台椀・杯蓋の器種がある。後者の時代は、3時期に分かれる。大きくは、14世紀、15世紀、17世紀で、後2者の遺物が目立つ。

SD01　土師器24点、珠洲5点、土師質火舎1点、越中瀬戸1点が出土した。（数字は破片数。以下同じ）。越中瀬戸は遺構上面からの出土で、17世紀の灰釉皿である。土師器皿には、一段ナデの浅い平底1・3、強いナデで口縁部が屈曲する平底2・5、口縁部が外方に延びる丸底4がある。1・3など口縁端部に油煙が付着したものが5点ある。時期は、14～15世紀である。珠洲には、甕1点・壺1点・擂鉢3点があり、14～15世紀である。

SD02　土師器12点、珠洲3点、越中瀬戸5点。土師器皿には、灰白色で口縁端部に煤付着の6、黒褐色の7がある。時期は15世紀である。油煙付着のものは2点ある。珠洲には、甕1点、壺1点、擂鉢1点があり、擂鉢は15世紀前半である。越中瀬戸は遺構上面からの出土で、灰釉皿2点、鉄釉皿2点、鉄釉碗1点がある。灰釉皿には、内底面に16弁菊の印花紋、外底面に墨書があるものがある。

SD03　土師器20点、八尾1点、珠洲2点、土師質火舎1点、越中瀬戸1点、肥前陶器1点。土師器皿8～13は、口縁端部を横に強くナデた13以外は、一段ナデの浅い平底である。口縁端部に油煙付着は1点である。14・15世紀である。八尾は甕で、14世紀であろう。越中瀬戸は灰釉皿、肥前陶器は外反する灰釉皿で、ともに遺構上面の出土である。時期は17世紀前半である。

SD04　土師器25点、珠洲2点、越中瀬戸2点。土師器14～18は、口縁端部が屈曲した15・16・18、口縁端部を横にナデた17などがある。油煙付着は2点。時期は15世紀～16世紀初めである。珠洲には、甕、擂鉢がある。越中瀬戸は灰釉皿・鉄釉皿で、共に内面に釉止めの段がある。遺構上面からの出土。

SE01　土師器41点、珠洲5点、越中瀬戸5点、肥前陶器2点。土師器23は、口縁部外面に爪跡が一周する。越中瀬戸は、25・26などの灰釉皿3点、鉄釉皿1点、鉄釉碗24がある。27は唐津壺である。

SE03　土師器1点、珠洲3点が出土。珠洲擂鉢28・29は、14世紀である。

SE04　土師器3点、珠洲2点、白磁1点がある。土師器皿30・31は15世紀、珠洲擂鉢32は15世紀中頃である。33は、内面に白線が入る白磁で、肥前磁器であろう。

SZ01　土師器2点、珠洲3点、瀬戸2点、越中瀬戸6点、肥前磁器1点。38は横に強くナデた口縁端部で丸底の土師器、39は瀬戸灰釉平碗の底部、14世紀末～15世紀前半である。越中瀬戸には灰釉皿41・42、鉄釉皿40、釉止めの段のある向付灰釉皿43がある。17世紀。肥前磁器は、コンニャク印判の碗で、17世紀後半～18世紀である。

SZ02　土師器1点、珠洲1点で、共に15世紀である。土師器皿35は凹み底である。

SZ04　土師器52点、珠洲5点、瀬戸2点、越中瀬戸7点。土師器皿37は、口縁端部をつまみ上げる。16世紀前半である。52は瀬戸穴窯末の天目、15世紀末である。越中瀬戸には17世紀の擂鉢・灰釉皿36がある。

SZ05・06　SZ05・06の出土遺物を区分が困難のため、一括して述べる。土師器4点、八尾1点、珠洲1点、瀬戸1点、越中瀬戸5点がある。土師器皿は15世紀、八尾甕・珠洲甕・瀬戸灰釉壺は14～15

世紀である。越中瀬戸には灰釉皿21・22、鉄釉皿20、天目碗19がある。20～22の内底面には釉止めの段がある。22の内底面には16弁菊の印花紋がある。

SK05　越中瀬戸擂鉢53、内底面に胎土目に残る唐津灰釉碗54がある。

SK06　15世紀～16世紀初めの土師器皿55～59がある。　**SK07**　60は14世紀の珠洲擂鉢である。

SK10　土師器皿61は、口縁端部が肥厚する。16世紀前半。63は、畳付が無釉の白磁皿で、16世紀。

SK12　穴の覆土上層から土師器64、越中瀬戸灰釉皿65が出土している。

SK15・SK16　土師器66～68は、15世紀である。その他、**包含層**からは、土師器皿69～72、15世紀の瓦質火舎73、越中瀬戸の鉄釉皿74・75（内底面に菊・5弁桜の印花紋）・鉄釉碗76・灰釉を掛け流した鉄釉瓶77、肥前陶器の灰釉皿78・79・灰釉碗80が出土している。

金属製品

刀子・釘・鎹・古銭などがある。SD06から刀子型鉄製品が出土した。全長が不明だが、幅3.5cmである。寛永通寶がSD01の上面から出土している。半分欠損しているが、新寛永通寶である。錆着が激しいが、釘・鎹がSZ05・06、SK06、SK10から出土している。

石造物（第14図1～11、第15図12～23、第16図24～30）

合計30点の石造物が出土した。それぞれの出土位置は、第18図に記した。それぞれの内訳は、五輪塔の地輪（1～13・23～30）、空風輪（14、15）、水輪（16）、火輪（17、18）、石標？（19）、板石塔婆（20、21）、礎石？（22）となる。22～30は井戸SE02の積み石に転用された石造物である。

五輪塔地輪は大別して、Ⅰ類〈上・下面に河原石面をとどめるもの（1、22礎石？、23）〉、Ⅱ類〈下面に河原石面をとどめ、上面は小叩き（＝ツツキ）で水平もしくは甲盛（＝むくり）に仕上げるもの（2～6、24～28）〉、Ⅲ類〈底面を粗割りのままとし、粗割り面がわずかに窪むものとふくらむものとがある。（7～13、29、30）〉。22の上面は、河原石面を止めるが尖鋭な工具によるツツキ痕がある。3・8・9は被熱による黒色や赤褐色面があり、それが原因と思われる剥落がみられる。16、20、21には薬研彫りで「バン」の種子が刻まれている。16、20は洪水砂礫土中に嵌入して検出された。火輪17は屋根が低く、軒先は心反りで下面も軒先と共に反る。下面に河原石面を一部残して、屋根の反りに合わせている。18は、軒先が端反りで下面はほぼ水平をなす。19は、風化が激しく原形面を失っている。材質は、12が凝灰石？、19が砂岩製である。その他は、すべて安山岩製である。

石器（第16図31・32、第17図33～36）

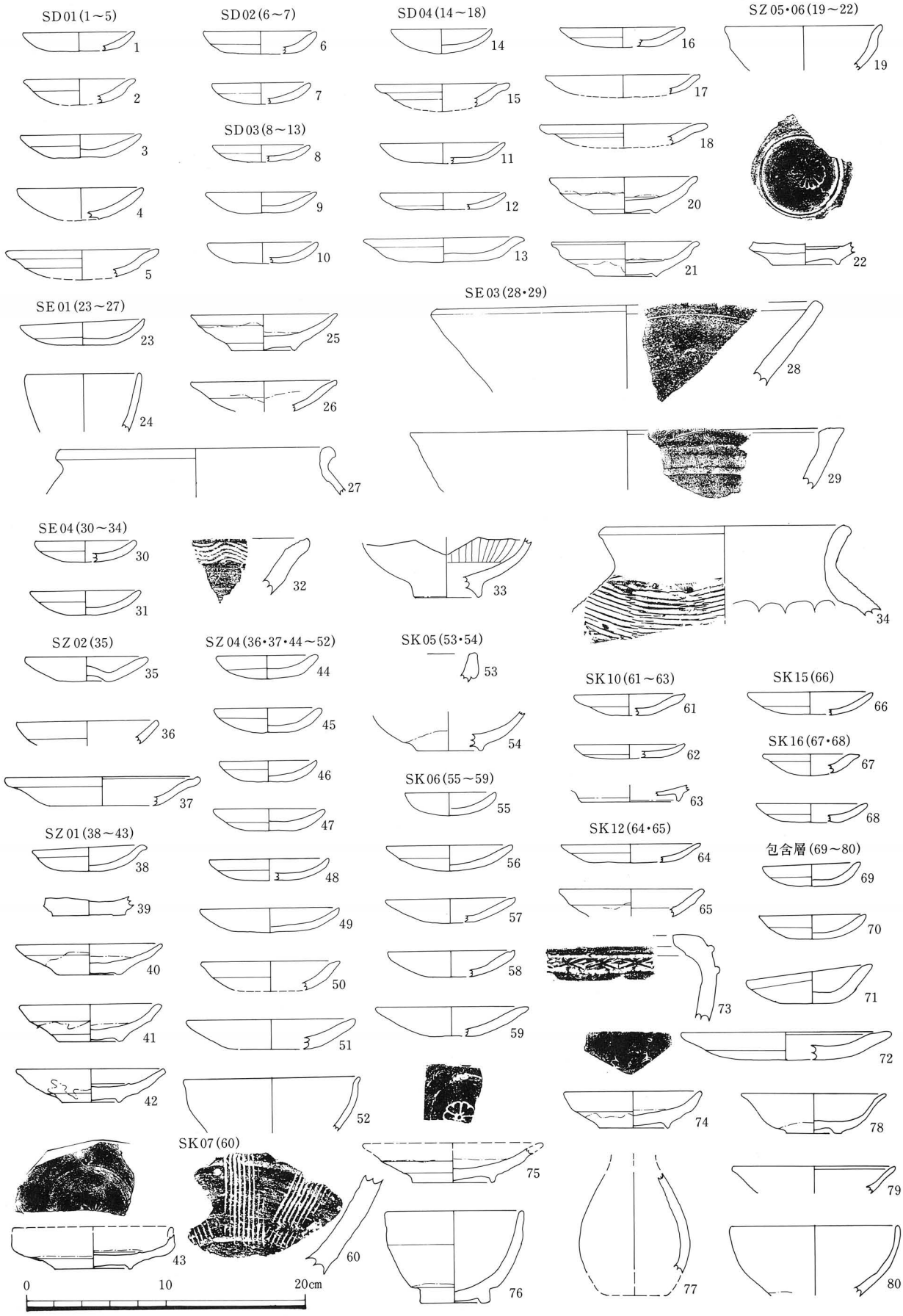
石皿（31）自然の扁平石の一面に擦痕があり窪みを呈し、擦痕は端部にまで延びている。

凹石状石製品（32･34～36）32は、SZ06の覆石中に混在していた。扁平礫の片面中央に微かに円形状の敲打による凹面をなす。礫は半分に割れており、割面以外は火熱による煤で黒色を呈する。34は、両面が凹を有し凹部は平滑面を呈する。35は、片面に凹を有し、凹部は平滑面を呈する。36は、両面に凹を有し、図の平面の凹部は平滑面をなすが、反対面の凹は敲打痕をとどめる。

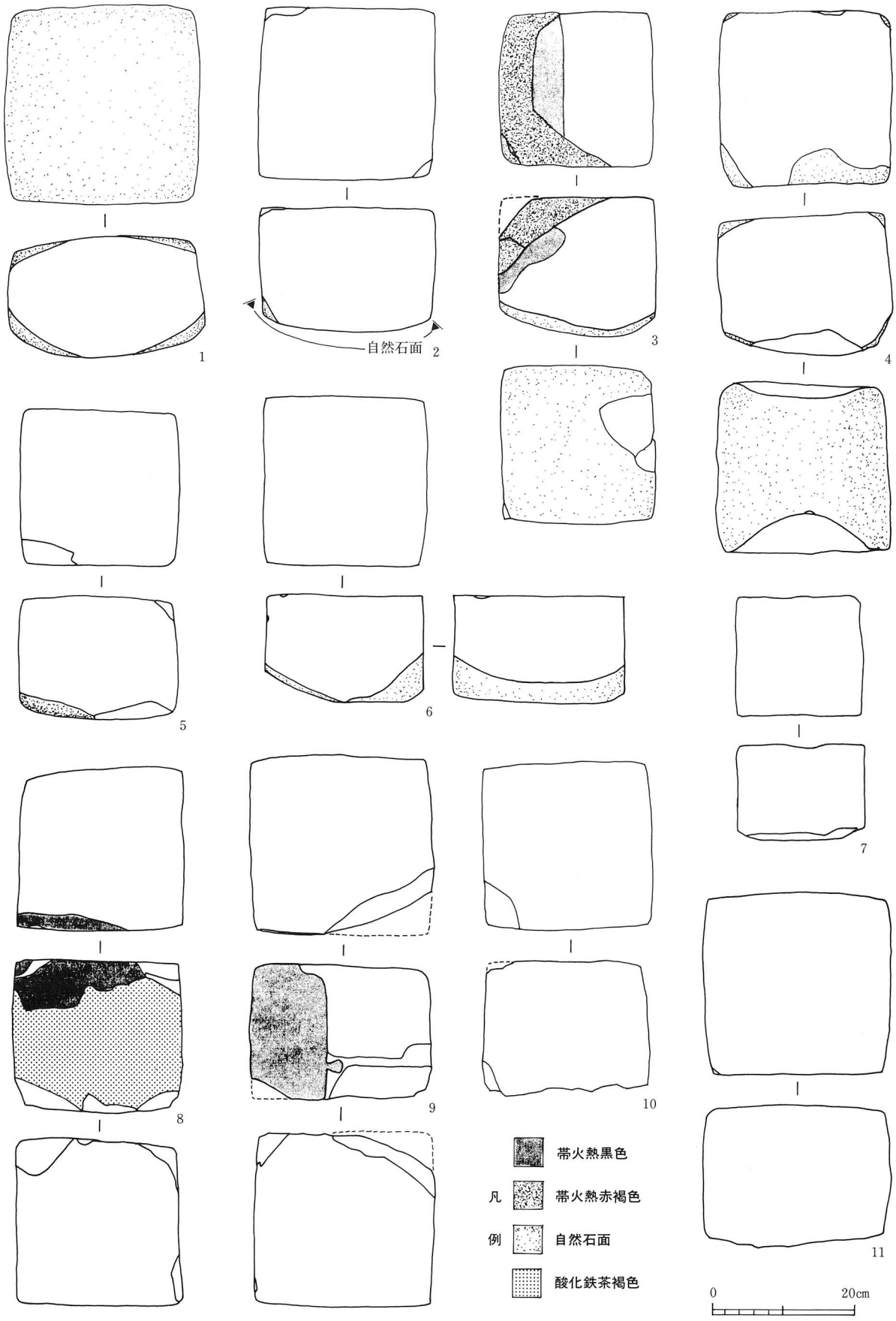
線刻礫（33）SZ01の覆石排出の仮置場から表面採集されたもので、SZ01の覆石に含まれていた可能性が強い。一面が平坦をなす扁平礫を用いており、図の上半分は割れ失われている。線は、おおむねV字状に刻まれ深い部位で2㎜に達し、縦に5本と斜位に数本が引かれている。石の色調は灰白色系を基調とするが、下端部にかけてあざやかな朱色が嵌入している。（自然色調でスクリントーン部）。この線の意味するところは不明であるが任意性が高いと思われ、線刻礫として扱った。

木製品（第17図37）

井戸SE02の井戸底から出土したスギの板材である。両端は自然破断し、両縁部には表皮面を残している。板材の縁部には半円加工が施されている。

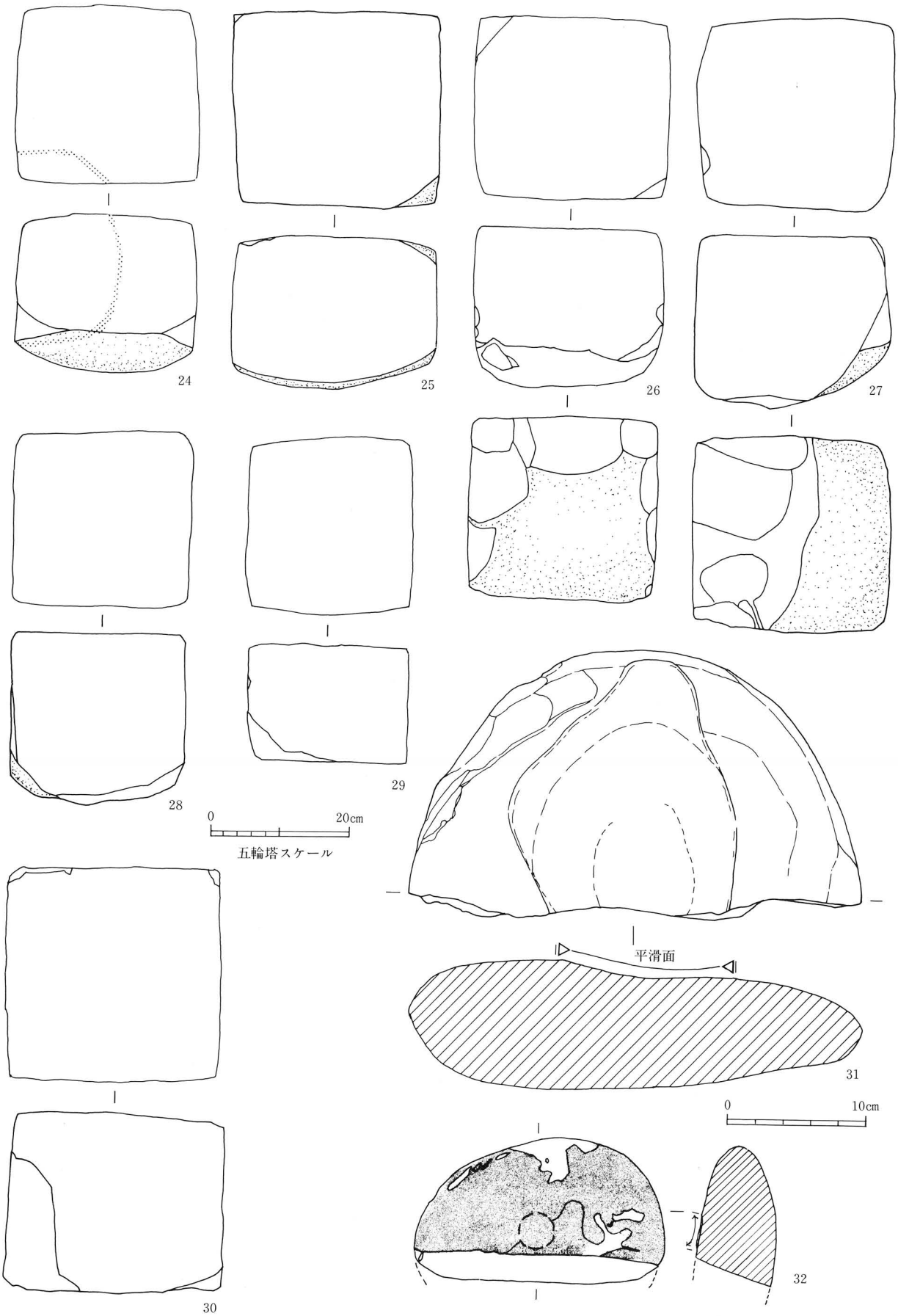


第13図　出土遺物（土器・陶磁器）

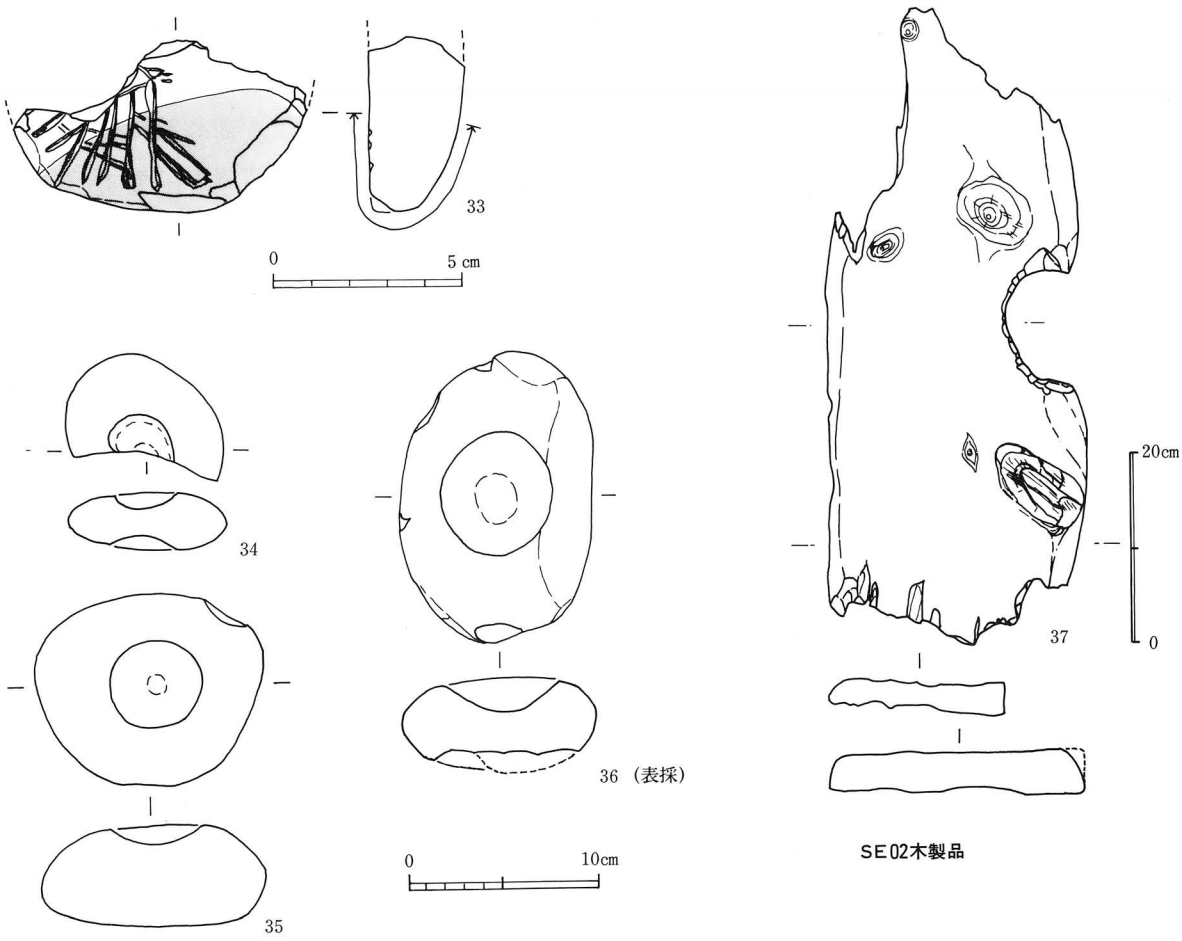


第14図　石造物・五輪塔類実測図（1～11）

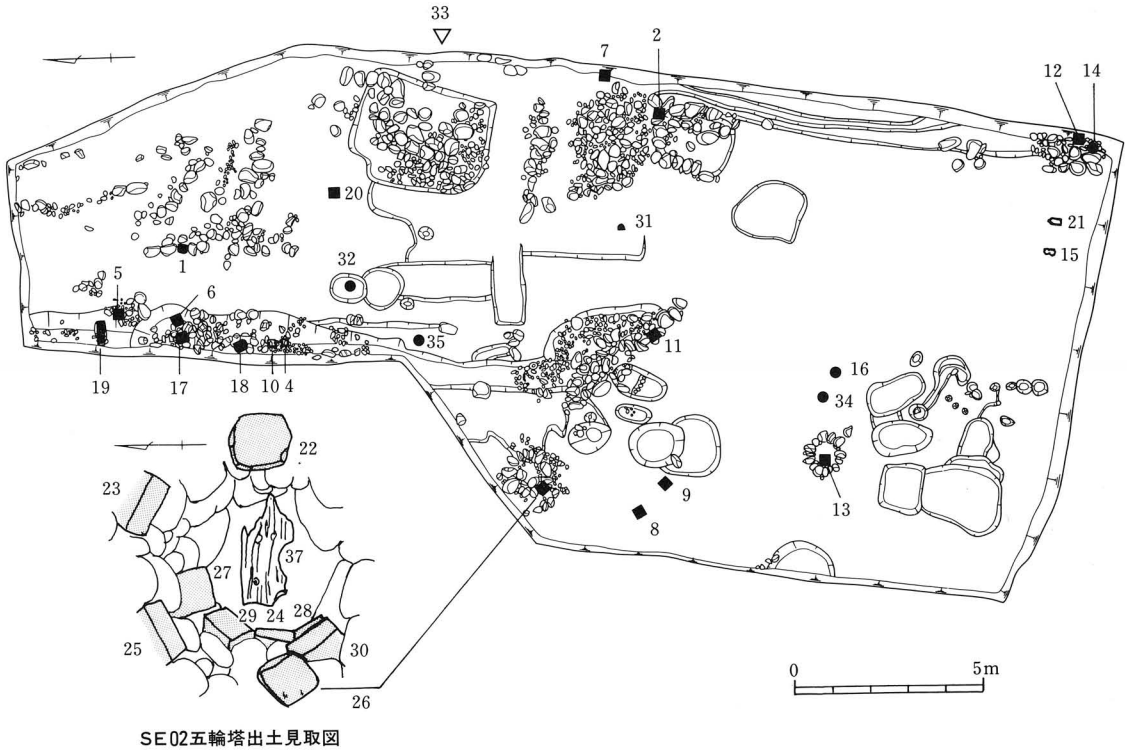
第15図　石造物・五輪塔類実測図（22・23はSE02出土）



第16図　石造物・五輪塔類・石器実測図（24～30はSE02出土）



第17図　石器（33～36）、木製品（37）実測図



第18図　石塔・石器出土位置図（番号は、第14～17図に同じ）4・10・15・21は推定位置、3は表採のため未表示。

Ⅳ　まとめ

1　遺構

建物跡・溝　ＳＸ07地区に、炭化物が集中分布し焼土の堆積（厚さ２cm前後）が認められた。また、ＳＸ01は土台石状に配置され、近くの五輪塔地輪（第14図８・９）に激しい帯火現象がみられたことからＳＸ07を中心として火災があったと推測された。溝跡（ＳＤ01・03・04）の遺物出土状態をみると、溝の下層からは中世遺物が、上面からは近世遺物が出土しており、火災建物は、近世に属すると判断された。溝は、覆土から中世遺物が、上面からは近世遺物が出土している。溝が中世に営まれ廃絶された後に近世の被火災建物が存在したと推測される。ＳＤ04は、貼石状の縁石を有するなど、単なる集水路ではなく、庭園や寺院などの特殊建物の付属施設としての性格が強いと思われた。

配石墓・土壙墓　配石墓４基（ＳＺ01・02・03・04）と土壙墓２基（ＳＺ05・06）を検出した。ＳＺ01・02・03は近世に属する。ＳＺ01には越中瀬戸が伴出している。また、ＳＺ02・ＳＺ03には中世五輪塔が転用されていた。ＳＺ01・02・03は、静岡県磐田市の一の谷中世墳墓群で注意された“「コ」の字形区画墓”と形態が類似している（磐田市　1993）。そこでは、12世紀中葉から末葉のかわらけや13世紀前半代の常滑産の蔵骨器を伴っていて、墳墓群の初期の段階で採用された形態とされている。上市町の黒川上山古墓群では、67基の中世古墓（12世紀後半～15世紀）が発掘されており、方形配石墓や方形の塚墓が築かれているが、「コ」の字形区画墓は確認されていない。婦中町の堀Ⅰ遺跡のⅡ－１・２配石墓は、本遺跡のものと形態が類似し、縁石で囲んだ内部にはシルト質の土が盛られているなど共通性がある（婦中町 1996）。安養寺遺跡の「コ」の字形区画墓は17世紀代と思われ、県域での当該形態の出現が、上山古墓群と安養寺遺跡との間の16世紀代にあったことを示唆する。ＳＺ04は、中世の集石墓とすることができる。ＳＺ05・06は近世土壙墓で、切り合いをなす。

井戸跡　ＳＥ01・02・03は中世の五輪塔残欠を転用・廃棄していることから、近世に営まれ廃棄に際して石蓋状の扁平礫を入れるなど一定の祭祀行為（とりわけＳＥ01・02）の執行を示していた。ＳＥ04は、中世の素掘井戸で、廃棄には小石を詰める祭祀行為を行っていた。

2　石器・石造物

凹石状石製品　安山岩製で縄文時代の凹石と類似しているが、凹が平滑面を呈し、深さに対して口径が広くなる特徴がある。類例は、新潟県巻町の近世寺院「城願寺跡」から出土している（巻町1985）。城願寺は、慶長６（1601）年に能登国鳳至郡鵜入村から移転してきたとされ、江戸時代を通じて栄えた寺院である。このように凹石状石製品は近世寺院と関係する事例のあることを注意しておきたい。

石造物　ほとんどが安山岩製で、河原石面を残す作りに特徴がある。石材は常願寺川水系に類似するものがある。五輪塔の火輪は14世紀代と思われ、特に古いものに第15図17があり13世紀末～14世紀初頭とみられる。これに伴う地輪もあると想定されるが、地輪のほとんどは15世紀代に属すると思われる。板石塔婆の第15図20は15世紀中頃、第15図21は16世紀頃とみられている（京田良志・西井龍儀氏教示による）。本遺跡の南西に隣接する安養寺地区の墓には五輪塔残欠などが集積されており、本遺跡出土の石造物との関係などが注目される（図版10―５）。

3　安養寺遺跡の歴史的背景

安養寺遺跡は字「寺後（てらのうしろ）」に位置し、寺院との関係を示唆する。地名の「安養寺」の位置は不明である。当地域の寺院歴史では、正元２（1260）年に北条時頼が安養寺を焼打ちしたとの伝承がある。享保元（1716）年頃には禅宗大雲寺があり、寛政４（1792）年に安養寺の大火で寺も宮も焼けたとある（熊野郷土史1989）。出土品に、五輪塔や火舎など寺院関係のものがあることが注目される。（藤田）

4　土器・陶磁器

古代　須恵器は、表面がほとんどローリングを受けてすり減っている。調査区の中央部を流れている旧河道によって運ばれてきたのであろう。須恵器には杯蓋・有台椀・甕がある。足高の有台椀や平行叩きの甕から9世紀後半と考えられる。対岸にある大規模な古代集落（任海宮田遺跡など）に対になるように、熊野川右岸にも古代の開発が予想される。

中世　土師器・瓦器・八尾・珠洲・越前・瀬戸・信楽・青磁・白磁の構成であるが、大部分は15世紀に属する。遺物の復元整理が十分でないので、時期別に遺物を、個体数でなく、破片数で数えた。大まかな傾向をつかめるものと考える。中世は3時期に区分される。

13世紀後半～14世紀の遺物は、土師器・八尾・珠洲である。破片数は数十点で少ない。在地瓷器系陶器の八尾は、13世紀中頃から14世紀後半まで生産が続く。本遺跡周辺は八尾の第1次供給圏に当たり、近くの任海鎌倉遺跡では、蔵骨器として八尾が使われている（富山県　1990）。しかし、本時期には土師器の完形品がない。しかも、土師器の皿、八尾の甕、珠洲の甕・壺・擂鉢の器種組成からでは、この頃から、墓地が始まったかは不明である。

15世紀になると、土師器・瓦器・珠洲・瀬戸・青磁の組成になる。食膳具は、土師器・瀬戸・青磁で、8割以上を占めている。貯蔵具は珠洲・瀬戸、調理具は土師器・珠洲で、ともに5％前後である。食膳具に土師器以外のものが占めており、墓地以外の遺構が拡がっていることが土器・陶磁器の組成からも分かる。土師器皿は口径が7～8cm、9～10cm、11～12cm、14～15cmに分かれ、8cm前後のものが多い。油煙付着率は、13％である。12cm以上のものは油煙が付着していない。口縁端部のみにわずかに付着するのが大部分であるため、油煙付着数は個体数で見ると、さらに多くなる。完形品の出土例からも土師器の多くは、埋納関係に使われたと考えられる。15世紀から土師器の擂鉢が、珠洲・越前のそれを模倣して在地で生産される。県内の遺跡からは定量出土している。火舎は3個体以上出土しており、寺院関係の製品とも考えられる。火舎には土師質と瓦質があるが、15世紀からは、奈良火鉢産以外に在地でも生産される。瀬戸は15世紀から増えてくる。本遺跡では青磁に比べると、瀬戸の量が多い。瀬戸・青磁は碗が主体である。

16世紀になると、土師器・越前・信楽・白磁の構成となる。破片数は少なくなる。食膳具は土師器・白磁、貯蔵具は越前・信楽、調理具は越前である。それらは、埋葬関係以外に日常生活用具として使用されていることが分かる。16世紀では、陶器の主体が珠洲から越前に変わる。信楽の壺は茶壷として使われたのであろう。16世紀後半の遺物は、ほとんど出土していない。

近世　18世紀までの遺物が出土しているが、大部分は17世紀である。越中瀬戸と肥前陶磁で構成されている。砂目唐津や初期伊万里がなく、土師器皿も出土していない。土師器皿の激減が、県内の近世集落の特徴である。越中瀬戸が87％、肥前陶磁が13％で、越中瀬戸が圧倒的に多い。用途別に見ても、越中瀬戸が食膳具、貯蔵具、調理具で8割以上を占めている。県内の17世紀の遺跡では、都市や港町では肥前陶磁、農村や生産地周辺で越中瀬戸が多い（北陸中世　1997）。本遺跡でも同様であることが分かる。越中瀬戸の皿は灰釉が58％で、半数以上を占めている。時代が下れば、鉄釉製品が増加することからも、灰釉製品が多いことは、17世紀の特徴をよく示している。さらに、越中瀬戸の皿は、内底面や高台畳付けが使用のため、すり減っている。日常用容器として使用された後、埋納用途に転用されたものが多い。　（宮田）

中世の土器・陶磁器の器種別組成

種　類	器　種	破片数	全体での%	種類での%
土師器	皿	601	82.1	98.7
	擂　鉢	2	0.3	0.3
	火　舎	3	0.4	0.5
	不　明	3	0.4	0.5
	小　計	609	83.2	100
瓦　器	火　舎	11	1.5	100
	小　計	11	1.5	100
八　尾	甕	4	0.5	100
	小　計	4	0.5	100
珠　洲	甕	17	2.3	20.7
	壺	23	3.1	28.0
	擂　鉢	42	5.7	51.2
	小　計	82	11.2	100
越　前	甕	1	0.1	20.0
	壺	2	0.3	40.0
	擂　鉢	2	0.3	40.0
	小　計	5	0.7	100
信　楽	壺	1	0.1	100
	小　計	1	0.1	100
瀬　戸	平碗	2	0.3	14.3
	天目碗	9	1.2	64.3
	皿	1	0.1	7.1
	壺	2	0.3	14.3
	小　計	14	1.9	100
青　滋	皿	1	0.1	20.0
	碗	4	0.5	80.0
	小　計	5	0.7	100
白　滋	皿	1	0.1	100
	小　計	1	0.1	100
総　計		732	100	

中世の土器・陶磁器の用途別組成

用　途	種　類	破片数	全体での%	用途での%
食膳具	土師器	601	84.1	97.1
	瀬　戸	12	1.7	1.9
	青　滋	5	0.7	0.8
	白　滋	1	0.1	0.2
	小　計	619	86.6	100
貯蔵具	八　尾	4	0.6	8.0
	珠　洲	40	5.6	80.0
	越　前	3	0.4	6.0
	信　楽	1	0.1	2.0
	瀬　戸	2	0.3	4.0
	小　計	50	7.0	100
調理具	土師器	2	0.3	4.3
	珠　洲	42	5.9	91.3
	越　前	2	0.3	4.3
	小　計	46	6.4	100
総　計		715	100	

近世の土器・陶磁器の器種別組成

種　類	器　種	破片数	全体での%	種類での%
越中瀬戸	皿	105	56.1	64.8
	向　付	2	1.1	1.2
	碗	17	9.1	10.5
	擂　鉢	20	10.7	12.3
	鉢	1	0.5	0.6
	壺	9	4.8	5.6
	徳利	3	1.6	1.9
	サヤ	5	2.7	3.1
	小　計	162	86.6	100
肥前陶器	皿	12	6.4	57.1
	碗	7	3.7	33.3
	壺	2	1.1	9.5
	小　計	21	11.2	100
肥前磁器	皿	1	0.5	25.0
	碗	2	1.1	50.0
	壺	1	0.5	25.0
	小　計	4	2.1	100
総　計		187	100	

近世の土器・陶磁器の用途別組成

用　途	種　類	破片数	全体での%	用途での%
食膳具	越中瀬戸	124	68.5	84.9
	肥前陶器	19	10.5	13.0
	肥前磁器	3	1.7	2.1
	小　計	146	80.7	100
貯蔵具	越中瀬戸	12	6.6	80.0
	肥前陶器	2	1.1	13.3
	肥前磁器	1	0.6	6.7
	小　計	15	8.3	100
調理具	越中瀬戸	20	11.0	100
	小　計	20	11.0	100
総　計		181	100	

参考文献

磐田市教育委員会　1993　『一の谷中世墳墓群遺跡』（本文編・図版編）

上市町教育委員会　1997　『黒川上山古墓群発掘調査第2次調査概報』

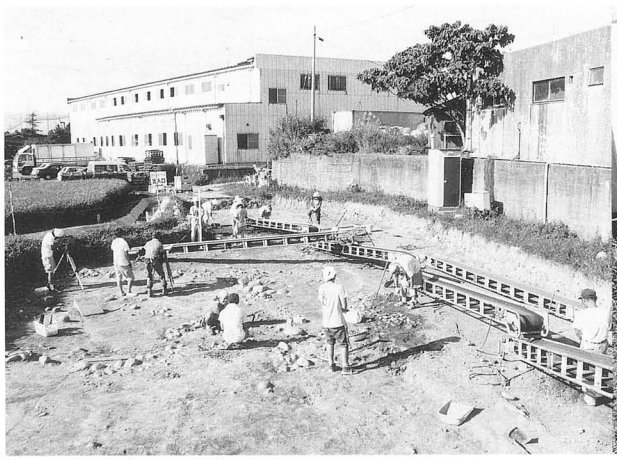
熊野郷土史編纂委員会　1989　『熊野郷土史』

富山県埋蔵文化財センター　1990　『富山県総合運動公園内遺跡群発掘調査概要Ⅰ』

婦中町教育委員会　1996　『堀Ⅰ遺跡発掘調査報告』

北陸中世土器研究会　1997　『中・近世の北陸』

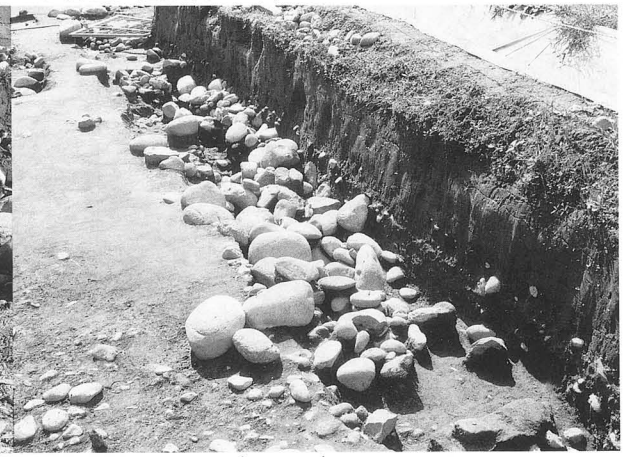
巻町教育委員会　1995　『城願寺跡・坊ヶ入墳墓』



1．調査区近景（南より）

2．調査区近景（北より）

3．礫含みの土層（東壁）―手前はSZ04の完掘状況―



4．溝SZ01の上面（北から）

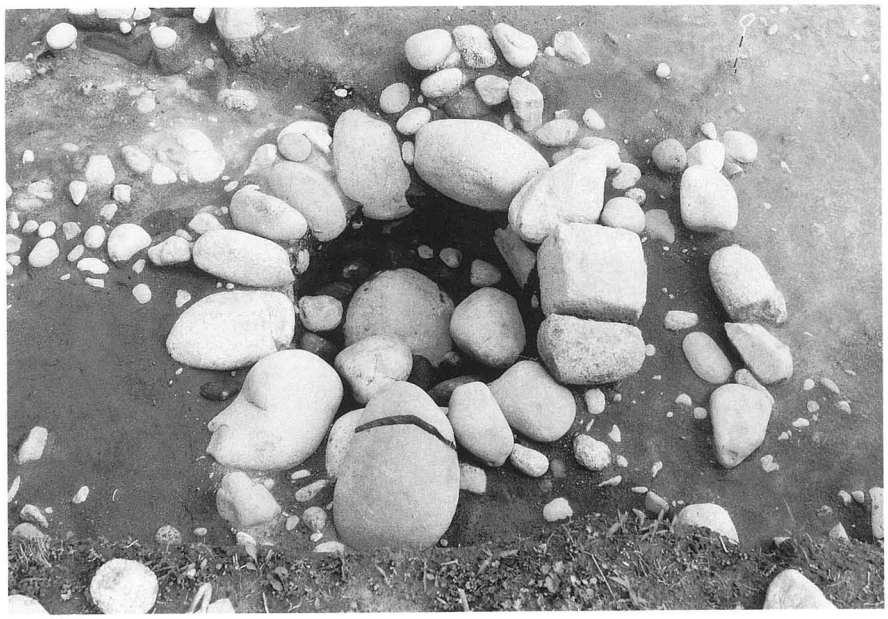
5．溝SZ01の完掘（南から）

図版2

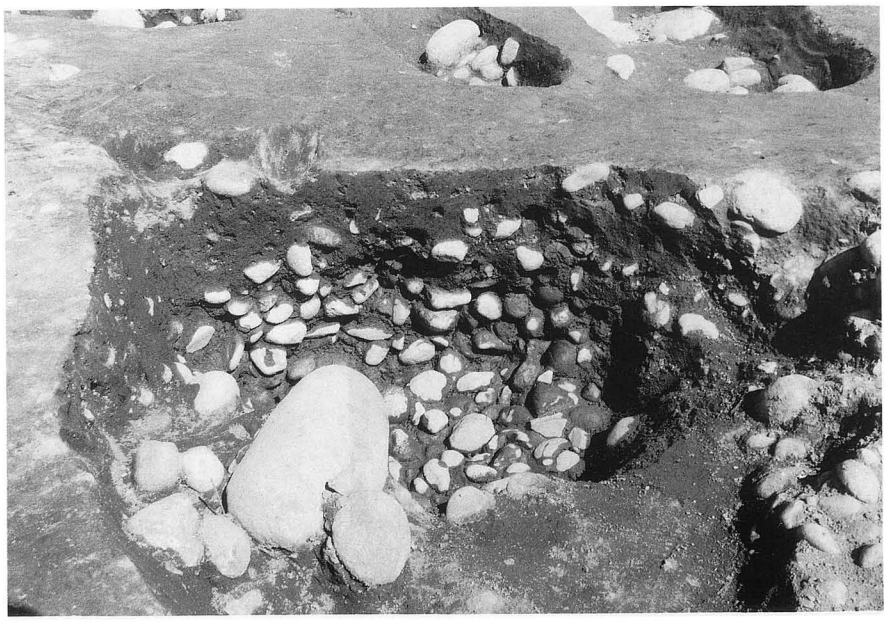
1．溝SD04の縁石検出状況（南東より）

2．井戸SE01断ち割り（北より）

1．井戸SE01の中層

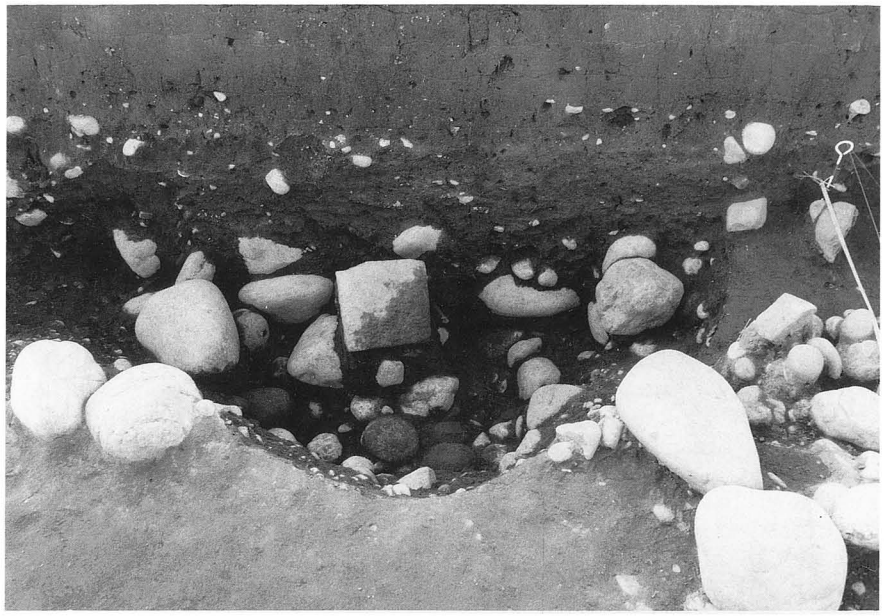


2．井戸SE02の上層

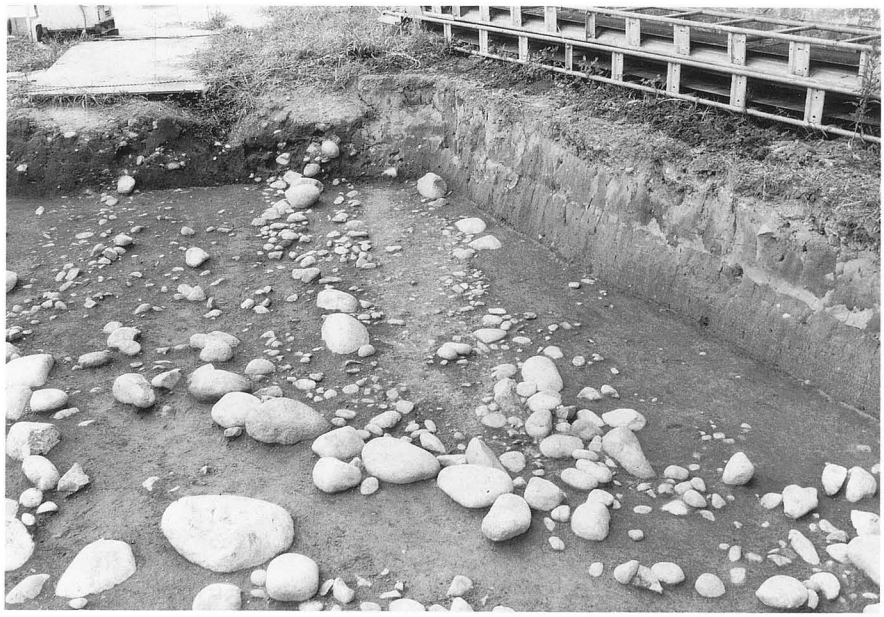


3．井戸SE03の小石の検出状況
（断面―南西より）

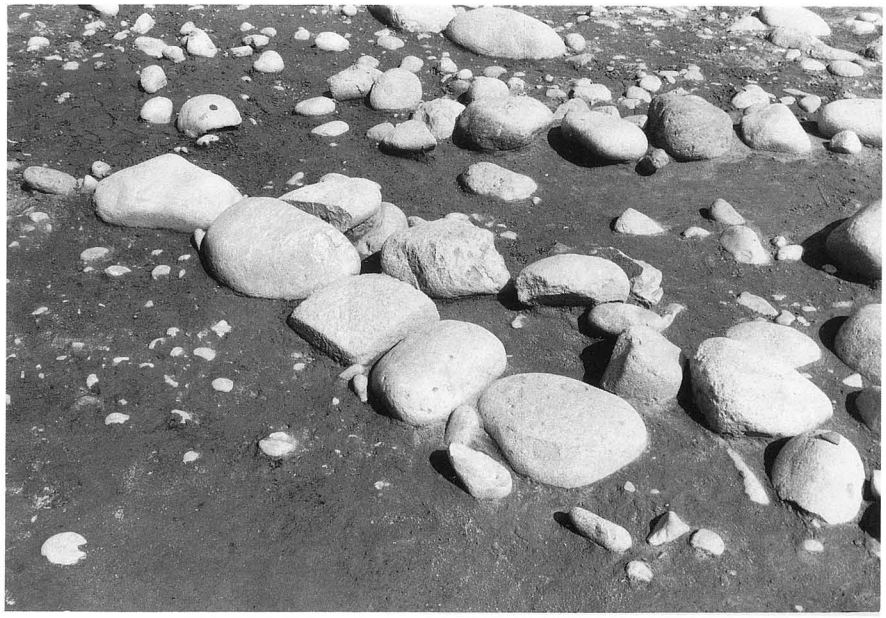
図版4



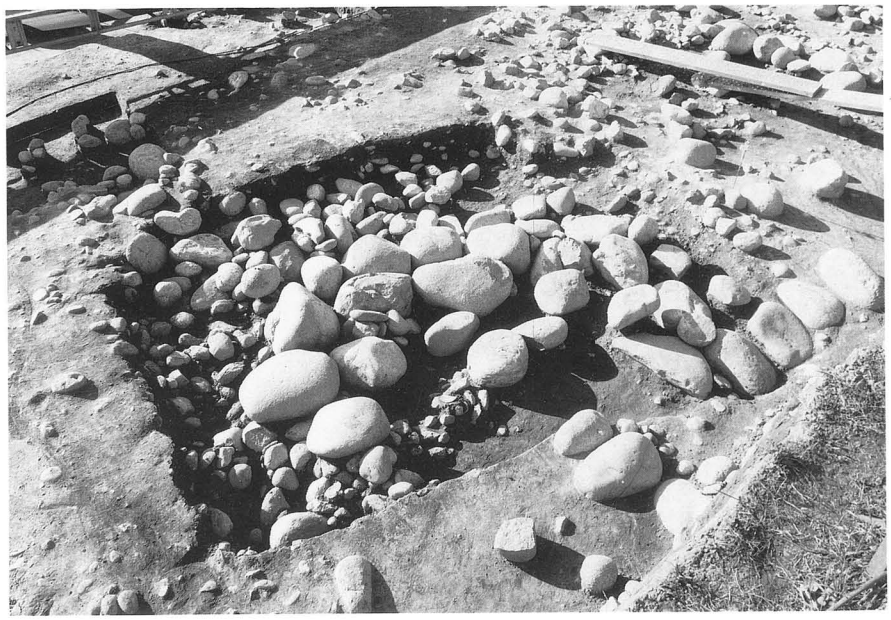
1. 井戸SE04の検出状況
（中央に火輪出土）



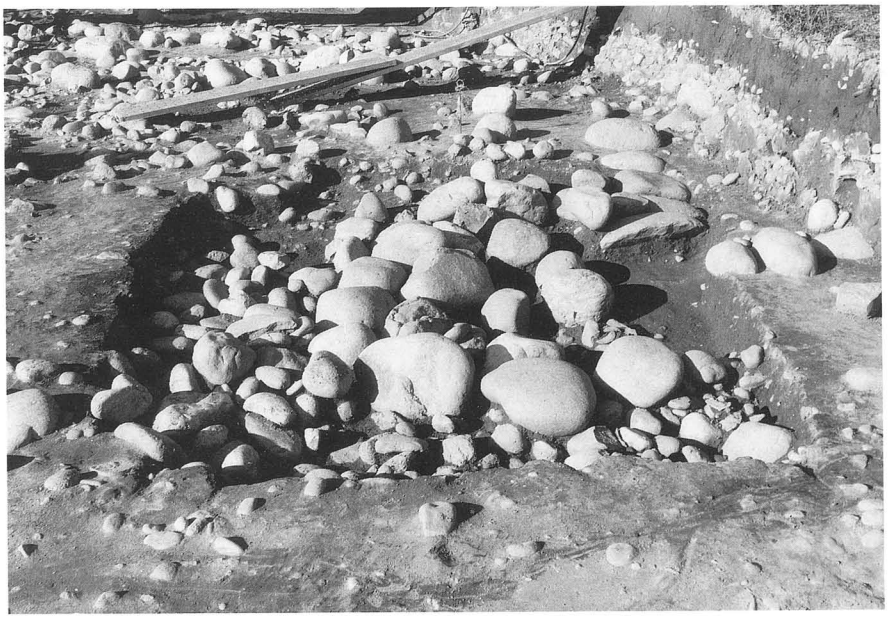
2. 道路跡SF01とその他遺構
SX04（南より）



3. その他の遺構SX02
（南西より）



1．配石墓SZ01とその他遺構
SX05(南東より)

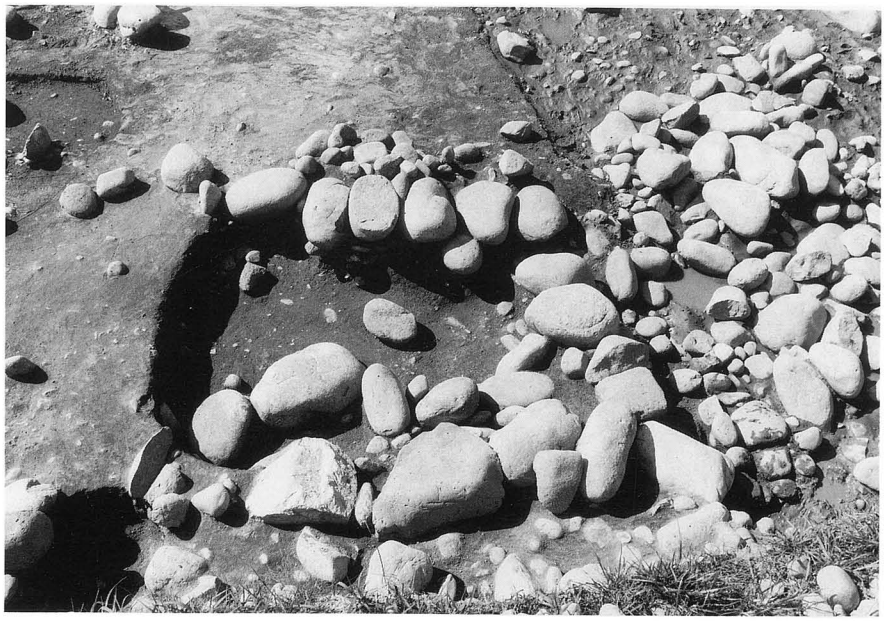


2．配石墓SZ01(南より)

3．配石墓SZ03（断面に地輪・
空風輪が出土―西より)

図版6

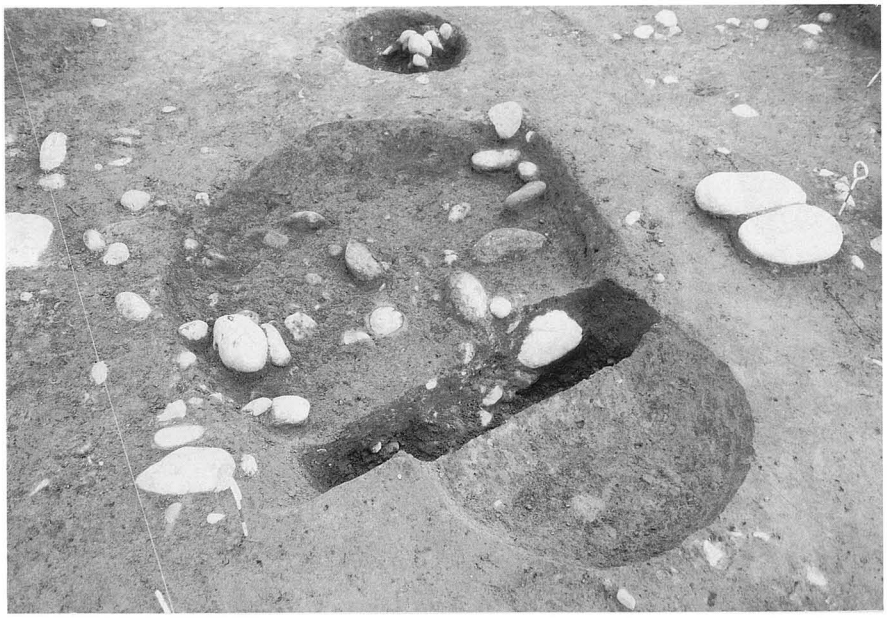
1．配石墓ＳＺ02(南西より)



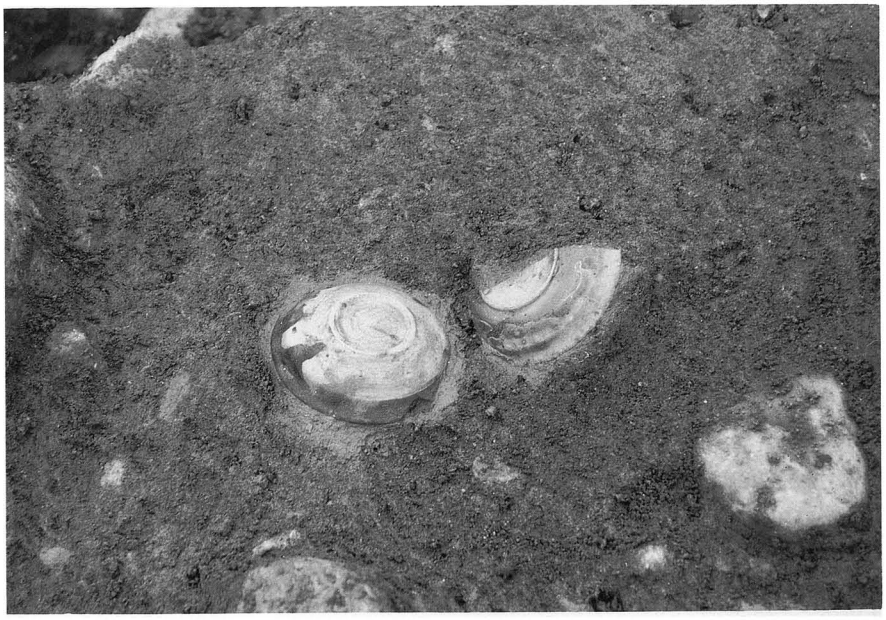
2．配石墓ＳＺ02(東より)

3．配石墓ＳＺ04とその他遺構
ＳＸ06(左端)（西より)

1．土壙墓SZ06の上面(南より)

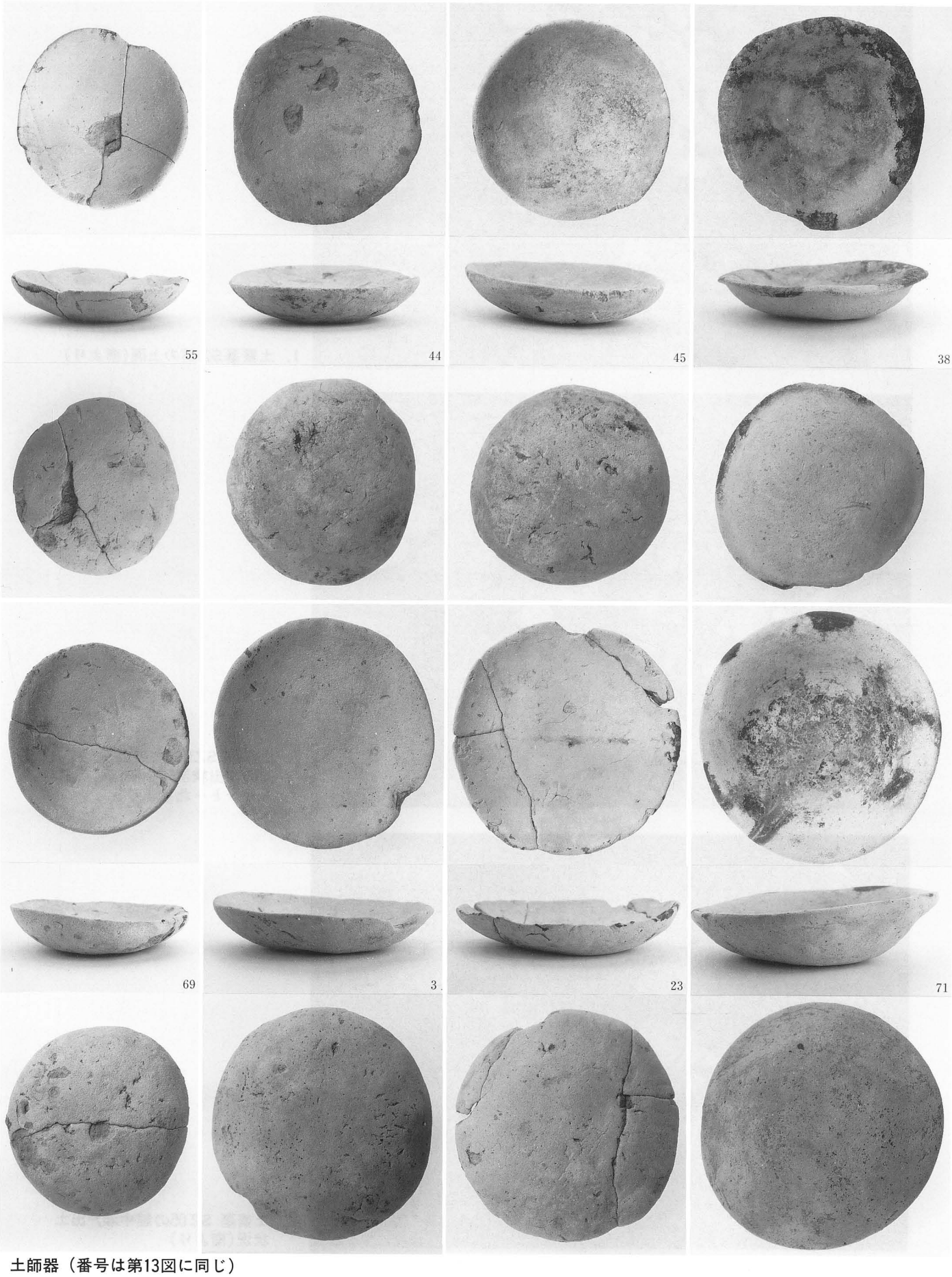


2．土壙墓 SZ06(右手前)とSZ05の検出状況（中央溝はテストピット－北東より)

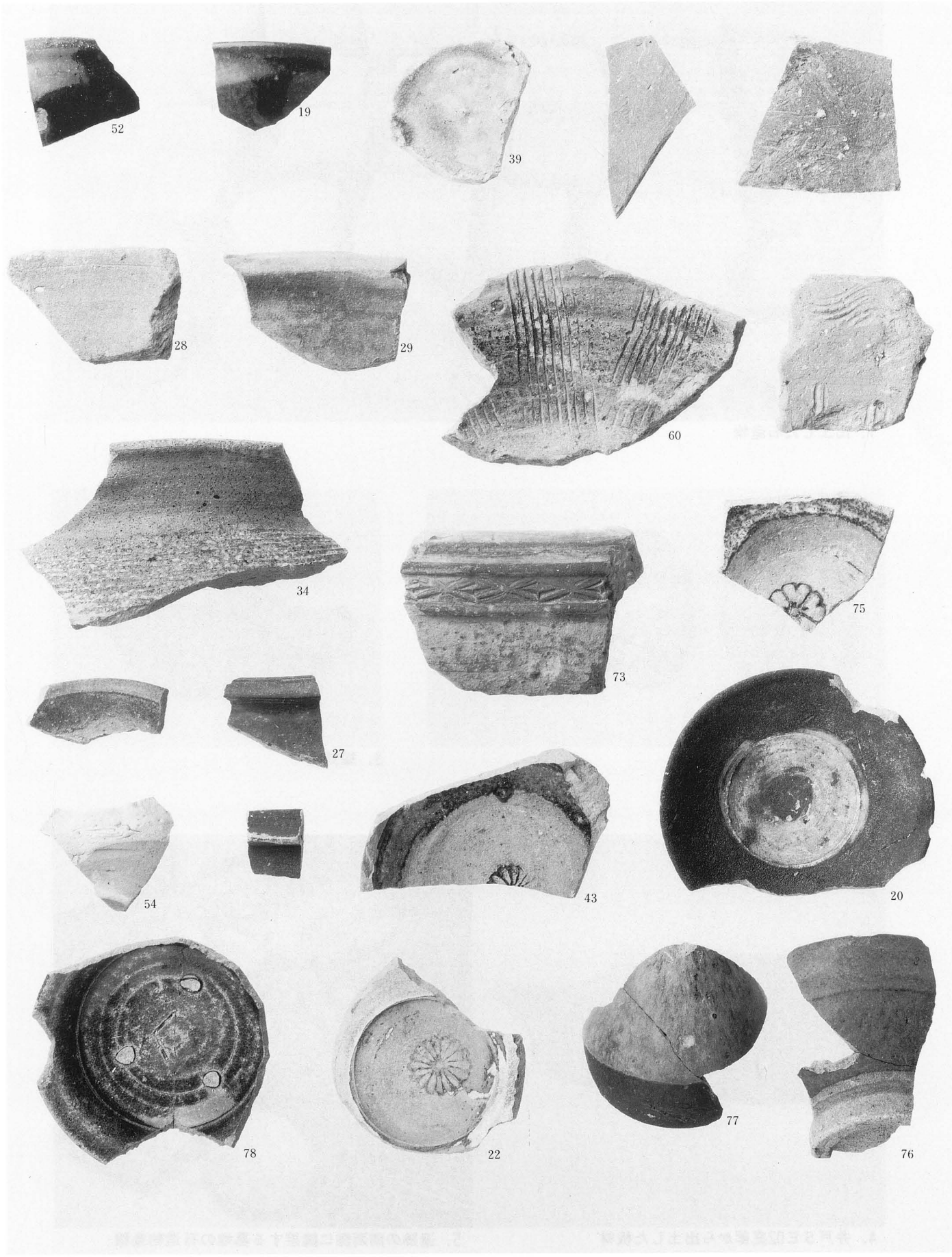


3．土壙墓 SZ05の越中瀬戸出土状況(南より)

図版8



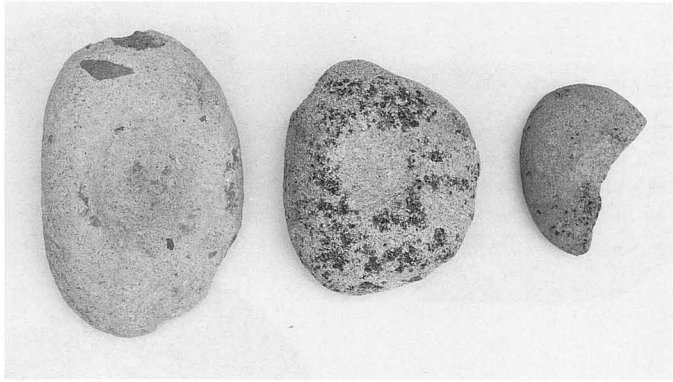
土師器（番号は第13図に同じ）



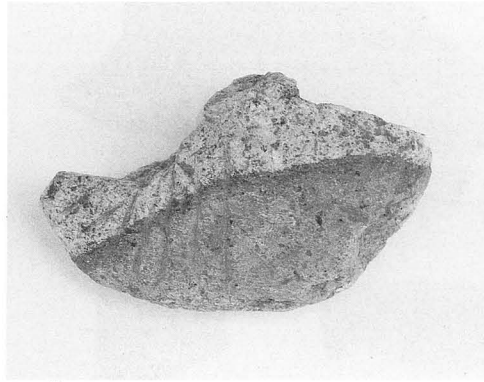
土器・陶磁器（番号は第13図に同じ）

図版10

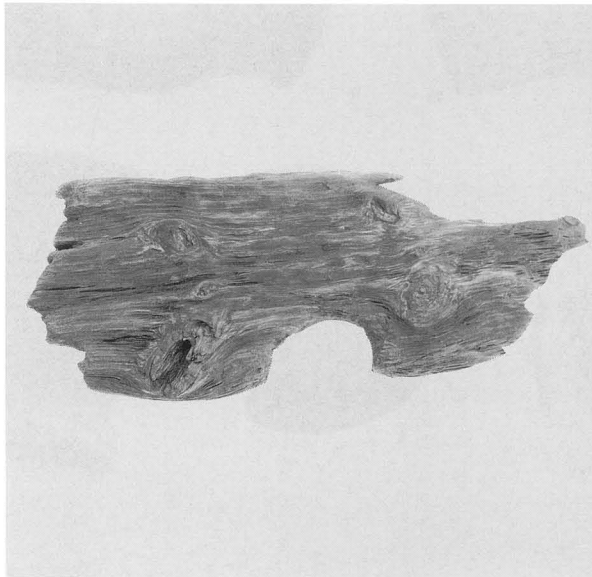
1．出土した石造物



2．凹石状石製品



3．線刻礫



4．井戸ＳＥ02底部から出土した板材

5．遺跡の南西側に隣接する墓地の石造物集積

報告書抄録

ふりがな	とやまし　あんようじいせき　はっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	富山市安養寺遺跡発掘調査報告書
編著者名	藤田富士夫
編集機関	富山市教育委員会
所在地	〒930－8510　富山県富山市新桜町７番38号　TEL（0764）43－2138
発行年月日	西暦1998年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
安養寺遺跡	富山県 富山市	16201	512	36度 37分 38秒	137度 12分 43秒	19970723 ～ 19971014	423	ガソリンスタンド増改築工事・国道41号線大沢野拡幅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
安養寺遺跡	墓 集落跡	平安・ 鎌倉～ 近世	溝 井戸 道路 配石墓 石列 土坑	須恵器、中世土師器、土師質土器、瓦質土器、八尾、珠洲、瀬戸、青磁、白磁、越中瀬戸、肥前陶磁器、五輪塔、凹石状石製品、線刻礫、金属製品、木製品	

富山市安養寺遺跡発掘調査報告書

編集・発行　富山市教育委員会
富山市新桜町７番38号
☎0764－43－2138
発　行　日　平成10年３月31日